財団法人 日本ハンドボール協会編　平成24年 11月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻531号

ハンドボール

特集
第41回全国中学校大会
第4回女子ユース世界選手権
第5回男子ユースアジア選手権

11

NOV.2012 No.531



表紙写真　第41回全国中学校大会[illegible]　茨城県[illegible]台中学　[illegible]選手　写真提供　[illegible]

財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/

ハンドボールを 楽しむ人たち



（財）日本ハンドボール協会常務理事・競技本部長　江成 元伸

111,188人、平成24年8月末日現在の日本協会登録者数です。がんばれハンドボール20万人会は10万人という目標を達成したので、20万人という目標値に拡大修正しました。この111,188人には、選手、チーム役員、審判員、日本協会・都道府県協会役員に、20万人会サポート会員（ハンドボールファン）が含まれており、いわゆる現在のハンドボール人口を表した数字です。この方々は、いろいろな形で日々、ハンドボールを生活の中に取り入れ、楽しんでいる人たちといえます。

ハンドボールを楽しむ人たちという意味で、選手は社会人（一般L、一般A、リージョナル)、大学、高専、高校、中学生（中学校、中学少年団)、小学生（小学校、小学少年団)、マスターズ、ビーチの選手たちが日々の練習、試合、あるいはシーズン毎の試合でハンドボール活動をしています。多くの選手は勝つこと、いいプレーをすることを目標に練習、試合をしています。また、勝つことを最大の目標にしているのではなく、ハンドボールの試合をすることが楽しいという人たちもいます。そのような方々は、現役時代は勝つことを目標にしていたが、それぞれの学校のクラブを卒業した今は、ハンドボールの練習、試合をすることが楽しいと感じている方々や、ハンドボールの魅力にとりつかれ、ハンドボールそのものが楽しいと感じている人たちです。

今年の夏、8月はロンドンオリンピックがテレビ、新聞で毎日取り上げられていました。ハンドボール以外の種目であっても、日本人が活躍する姿に感動しました。その中で、ハンドボールに日本が出場していなかったことに、悔しい思いをした人たちは多かったと思います。ナショナルチーム、ジュニア・ユースを含めて、日本代表チームは勝つことを目標としています。アジアで№1になるという目標と、世界で活躍するという命題を持ったチーム、選手は、厳しい、苦しい環境ではあっても、ハンドボールを楽しんでいると思います。11万人の希望と夢を一身に集めている日本代表選手が活躍するためには、ハンドボールを楽しんでいる全員のサポートが必要です。日本代表の活動資金の援助も、サポートの一つです。限られた日本協会の予算の中で、日本代表に支出できる予算が少ないことは、現在のそして将来の日本代表を世界に送るために不安が残ります。日本代表チームが活躍することで11万人は言うに及ばず、日本中の人たちに感動を与えることができます。活動を支える大きな要因の一つに、協会資金の確保があげられます。資金源は11万人の登録金からの支出、各種の補助金、スポンサーによる協賛金から成り立っています。スポンサー獲得は、今後も継続的に進めていきますので、登録金による資金の援助、強化のための協力金という、強化のためにも積極的な支援をお願いするところであります。

ハンドボールは往々にして、自分がプレーすることに楽しみを求める傾向にあると思います。自分だけでなく、周りのチームや選手を応援するという環境整備が必要だと思っています。多くのハンドボールチームは我が母校、我が組織、我がチームという感覚が強いと思います。今後は、我が郷土・地域の代表という意識が生まれるような環境作りをしていくようにしたいと思います。小学生、中学生、高校生でも、我が母校だけでなく、クラブチームも全国大会に出場する時は、ナショナルチームと同じ、日本の代表、地域の代表として活躍するという意識を持つことが、ハンドボールの新たな発展につながる道と考えています。地域の代表を応援していく環境が新たなハンドボールの発展する形ではないでしょうか。

私たちのハンドボールが一層楽しいハンドボールとなるよう、生活の中に溶け込むハンドボールとなるよう、環境作りやハンドボールの楽しみ方の意識を変えながら、盛り上げていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

第41回
全国中学校
ハンドボール
大会

写真提供：スポーツイベント社

最終順位
【男子】
優勝：名古屋市立はとり中学校（愛知県）
2位：福井市明倫中学校（福井県）
3位：浦添市立浦添中学校（沖縄県）
高松市立塩江中学校（香川県）
【女子】
優勝：守谷市立けやき台中学校（茨城県）
2位：浦添市立神森中学校（沖縄県）
3位：氷見市立十三中学校（富山県）
岩国市立平田中学校（山口県）

優秀選手賞	
【男子】	【女子】
中山泰志（はとり）	竹谷美樹（けやき台）
大平幹也（はとり）	佐藤七海（けやき台）
土橋颯句（はとり）	相澤菜月（けやき台）
藤坂幸輝（明倫）	高良奈歩（神森）
山川慎太郎（明倫）	仲間夕夏（神森）
川上勝太（浦添）	林　玲花（氷見十三）
山脇悠輔（塩江）	西本涼香（平田）

第41回全国中学校ハンドボール大会回顧

第41回全国中学校ハンドボール大会実行委員会　中里　薫

一度退いた委員長の職を3年前にまた引き受けることとなり、幸い自チームがその年の宮崎全中の出場権を獲得。監督として大会に参加しながら、試合に負けた後も宮崎県の先生方の運営をじっくり最終日まで拝見しました。今思えば、そこが茨城全中に向けてのスタートだったのかも知れません。その翌年の広島全中（第39回）、昨年の京都全中（第40回）と、下見に行きました。どの県も3会場運営ということで、茨城での開催方法と同じであったため、その点で大変参考になりました。

本県で開催される中学生の全国大会は、2回目ではありますが、第6回以来（35年ぶり）であるため、中体連が中心で取り組む大きな大会としては、初めても同然でした。いつ、何を、どのように進めればいいのか誰もわからず、もちろん自分も知るよしもありません。すべて、県ハンドボール協会に相談しながら運営にあたりました。その意味では、インターハイ、全国選抜の運営経験を持っていた茨城県ハンドボール協会の方々には、大変お世話になりました。

いろいろな方々に支えられながら、何とか開催にこぎ着け、第41回全国中学校ハンドボール大会は、「感動躍動ここにあり！関東平野の大舞台！」のスローガンのもと、8月19日（土）から4日間の日程で常総市水海道体育館、坂東市岩井体育館、守谷市常総運動公園総合体育館において、熱戦が展開されました。私は、試合会場が三市にまたがってしまったこと、どの会場もアップや応援等を考えると狭くて座席数が少ないこと、宿泊先から体育館までの移動距離が長く、移動時間が計算しづらい事など宿泊や施設面において、どこの県よりも劣っていることが一番の悩みの種でした。しかし、全国から集まる中学生ハンドボーラーに、少しでも満足してもらえるよう、開催3市のご協力で期間中は3会場とも空調（エアコン）が効くようにして頂きました。更に、中学生の全国大会では初めての試みとなったコートのカラーリングについても3会場とも施工して頂きました。狭い会場ではあったと思いますが、国際舞台のようなコートで伸び伸びと試合を楽しんでいる選手の表情を見て、役員全員の顔もほころんでいました。

さて、試合の結果は、1回戦から例年にない接戦が数多くあり、苦しい戦いを見事に勝ち上がり、男子の部：名古屋市立はとり中学校が3年ぶり2度目の優勝、女子の部：守谷市立けやき台中学校が地元の期待と大声援を受け、見事に初優勝を成し遂げ、また新たな歴史を刻んで4日間の幕を閉じました。

最後になりましたが、今大会を開催するにあたりご尽力頂きました（財）日本ハンドボール協会、（公財）日本中体連、茨城県、常総市、坂東市、守谷市、関東中体連、茨城県中体連、茨城県ハンドボール協会、そして協賛各位に改めて厚く御礼を申し上げますとともに、次年度開催である愛知県大会の大成功と東日本大震災の被害に遭われた地域の1日も早い復興を祈念して、今大会の回顧とさせて頂きます。みなさん本当にありがとうございました。



男子優勝 名古屋市立はとり中学校（愛知県）

感謝

名古屋市立はとり中学校ハンドボール部監督
深川 祐之

はじめに、第41回全国中学校ハンドボール大会を開催するにあたりご尽力いただいた（公財）日本中学校体育連盟をはじめ（財）日本ハンドボール協会、茨城県教育委員会、常総市教育委員会、坂東市教育委員会、守谷市教育委員会、並びに関係各位の皆様に改めて、心より厚く御礼申し上げます。

このたび、第41回全国中学校ハンドボール大会において3年ぶり2度目の優勝を果たすことができました。これも偏に日頃からはとり中学校ハンドボール部を支えていただいている保護者の方々やOBなどハンドボール部に助言・指導していただいた多くの方々の力あってこその結果だと思っております。そして何より、春の全国大会で悔しい思いをした選手たちの努力の賜物です。

本大会を振り返ってみると、一戦一戦どの試合も苦しく精神力が問われる試合ばかりでした。力強くバリエーション豊かなシュート力の大阪体育大学付属中、地元の大声援を受け思い切りの良いプレーを取組み続けた水街道西中、抜群の攻撃センスのある浦添中、そして緩急ある攻撃からバックプレーヤーとポストプレーヤーとの巧みな連係の明倫中。全試合ただただ必死に取り組んでまいりました。決勝戦終了のホイッスルが鳴った瞬間は言葉には表現できない感情がこみあげてきて、涙を抑えることができませんでした。4月から監督が代わり、私たちの言葉や考え方に戸惑いを感じていても解消し、成長し続けてくれた選手たち。8月22日まで歩んできた軌跡を振り返ってみると本当に「感謝」の一言につきます。保護者の皆様には、選手の食事や健康の管理・対戦相手の試合の撮影・練習中の水分の準備や確保など本当にハンドボール部を支えていただきました。

また、私を支えていただいた指導者の方々です。特に前監督の深見忠司先生の指導・助言がなければこのような輝かしい結果は得られなかったといっても過言ではありません。また、前年度優勝の平針中の島本先生の助言により自分を見失わず突き進むことができました。そして、家族です。心身共に支えてくれた妻。日々訪れるプレッシャーを和らげてくれた2人の息子。本当に家族の支えが原動力になりました。

優勝までの道程において力となってくださった多くの方々そのすべての方に改めて感謝申し上げます。未熟で至らないことだらけの私ですが、様々な方から受けた御恩やご指導はしっかりと心に刻み、今後も日々精進し、ハンドボール道を学び続けたいと思っております。

最後になりますが、執筆する機会を与えていただいた機関誌の方々に感謝します。

大会を終えて

名古屋市立はとり中学校
大平 幹也

僕たちは、春の全国大会で自分の精神的な弱さから焦ってしまい、ゲームが崩れ負けてしまいました。悔しい思いをした僕たちの夏への課題は、平常心でプレーすること。メンタル面で全員が強くなることでした。日本一になるには、心技体の心が強くなければ勝てないとわかりました。



春の全国大会が終わり、深見先生がほかの学校に代わり、これからキャプテンとしてチームをまとめていけるだろうかと、とても不安でした。今まで先生がやっていた



ことを自分がやらなければいけなかったり、プレー中の指示など大変なこともありました。自分が平常心を失ってしまうとチームに迷惑をかけてしまうので、メンタル面で強くなることは難しかったです。練習試合をたくさんして勝てるようになると、自分たちのプレーに自信が持てるようになり、心に余裕ができました。そして、平常心を失うことはなくなっていきました。試合で勝ち進んでいくことで、いつも通りのプレーをすればどんな相手にも勝てると思うぐらい、心技体の揃ったチームになったと思いました。

全国大会が始まり「はとり」というチームで試合ができるのは、多くてあと4試合と考えるとさびしい気持ちもあったけど、あと4勝すれば全国優勝と考えるとすごくわくわくしてきました。どの試合も楽なものはありませんでした。でもいつも通りのプレーをすれば勝てると信じていたので、焦ることなくすべての試合を楽しむことができました。全国の舞台でプレーできてとても幸せでした。

全国優勝という目標を達成した時は、とてもうれしかったです。私たちが優勝できたのは、今まで指導してくださった先生方や保護者の方々、たくさん相手をしていただいた先輩方などのおかげです。たくさんの応援をありがとうございました。今まで支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

女子優勝 守谷市立けやき台中学校（茨城県）

最後の笛を笑顔で

守谷市立けやき台中学校女子ハンドボール部監督
横尾 香織

創部5年目の夏、子どもたちは全国制覇を成し遂げることが出来ました。立ち上げ当初から、市当局、教育委員会の方々、県中体連の先生方、ハンドボール専門部の先生方、茨城県ハンドボール協会の方々、本校の先生方、杉本コーチ、私の恩師である大村先生、そして子供たちを見守り続けてくださった保護者の皆様のおかげで、子供たちが今回の結果を残すことが出来ましたこと、心より感謝申し上げます。

初代の最後の笛は東京都で行われた関東大会の1回戦。神奈川の西中原中学校に16対18で敗退。二代目の最後の笛は栃木県で行われた関東大会2回戦。群馬県の甘楽第一中学校に11対13で敗退。子供たちの泣いた顔が今でも鮮明に浮かびます。「悔し涙で引退させたくない」その思いが私の原動力となりました。

三代目の夏。最後の笛を笑顔とガッツポーズで聞いた子供たちの姿に、本当に感動しました。練習中から笑顔の多い子供たちでしたが、試合中の厳しい局面でも笑顔で言葉を交わし乗り切りました。負けたくない、私たちならいける、心からそう思っていたのだと思います。私も同じ気持ちでした。子供たちを信じていました。本当によく頑張ったと思います。

今回の経験は子供たちにとって大きな自信につながったと思います。私自身も指導者としての大切なことが、ほんの少し見えてきました。

四代目の目標は先輩方が出場した大会にすべて参加し結果を残すことだそうです。最後の笛を笑顔とガッツポーズで聞くことができるよう、子どもたちと一緒に努力して参ります。

二度目の全国制覇

守谷市立けやき台中学校
杉本　叶

今年の全中は、私たちの地元・茨城で開催されました。地元開催ということもあり、地元の期待にこたえられるかどうかというプレッシャーの中で、私たちは全中優勝を成し遂げることができました。春中が終わり、一つの目標を達成したことで、全中優勝という最終目標を忘れてしまい、練習にも身が入らず、時には練習試合で負けてしまうこともありまし



た。しかし、「悔しい」という気持ちが私たちのバネとなり、もう一度練習に打ち込みました。そして、6月に東久留米西中と練習試合をした時に2点差をどうしても縮めることができず、2試合とも負けてしまった時、私たちは、「次こそ勝ちたい、絶対勝ちたい」という思いでいっぱいでした。そして今までの何倍も練習に励み、より実践に近づけて一つ一つのプレーの精度を上げ関東大会へと臨みました。そして迎えた関東大会の決勝。相手は、東京都代表東久留米市西中学校。私たちがずっと勝ちたかったチーム。試合は互いに一進一退の攻防が続き延長戦に入りました。延長戦の結果、決着がつかず、7mスローコンテストになり、サドンデスの末1点差で勝利をつかむことが出来ました。試合終了の笛が鳴った時、みんなで泣きながらガッツポーズを決めました。残す大会はあと一つ。全中。自分たちの舞台に向けての最終調整は終わりました。

やることはやってきた。こうして臨んだ全中。春中と違うのは地元開催だということ。春中の時に体調を崩していた佐藤さんが万全の状態であるということ。そして「自信」です。他のチームは、私たちを"日本一のチーム"として見ているので、そのプレッシャーに打ち勝ち連覇するという気持ちでした。全国大会二日目。第一回戦の相手は、凌雲中学校でした。この試合はつまらないミスからの失点が多くてなかなか自分たちのペースでゲームを展開することができませんでした。大会三日目の二回戦。桜田中学校との試合。二日目の修正が出来て、私たちが得意としているディフェンスから速攻で点を取ることが出来ました。そして最終日。勝っても負けても最後の日がやってきました。準決勝は、春中の決勝で当たった氷見十三中学校。前半戦は相手のポストプレーに苦しみ11対7の4点差で負けていましたが、その時のハーフタイムでは速攻！速攻！と声を掛け合い、強気で後半戦に向かいました。後半戦は、落ち着いて1点1点点数を縮めることができ、最後は1点差で勝ちました。

決勝。「絶対に負けたくない」「負けられない」「地元開催」「勝っても負けても最後」いろんな思いがあって臨んだ決勝戦。試合開始の笛が鳴り…、けやき台中生としての最後の試合がスタートしました。相手は、九州代表沖縄県の神森中学校です。個人技に長けたスピードのあるチームでした。私たちの得意としている速攻も防がれてしまいましたが、落ち着いて緩急を使うことを意識して攻めるようになり、得点を積み重ね、前半11対6の5点差で折り返しました。しかし、後半は、ディフェンスの乱れから相手にリードを許してしまい、途中同点に追いつかれました。そこで横尾先生がタイムアウトを取り、「集中しろ !!」と激を飛ばしマンツーマンディフェンスから再スタート !! 神森中の勢いが止まり、波が自分たちの方へ戻ってきました。結果は23対20。最後までゴールを狙い続ける先輩方の教え通り、ポスト山口さんが最後もホイッスルと同時に得点し、けやき台中学校女子ハンドボール部での全てを出した試合が終了しました。試合終了の笛を聞いた時には、勝利の涙ではなくみんな満面の笑みで抱き合っていました。

私たちの目標を達成することができたのは、毎日ご指導してくださった横尾先生をはじめ、茨城県や守谷市、地元の方々、保護者の方々、先生方、先輩方、友達が支えてくださったおかげです。また、今までずっと一緒に頑張ってきたチームのみんながいてくれたおかげでもあります。次の目標はJOCでも優勝し、三冠を取ることです。そして、もう一度全国の頂点に立ちたいです。全国大会が茨城県で開催されて本当によかったです。ありがとうございました。



戦評

男子

【準決勝】

はとり中学校　29（13-12、16-12）24　浦添中学校

お互いGKの好セーブから試合が始まった。はとりは、六鹿のポストシュート、浦添は宮城のロングシュートなどで得点を重ね、一進一退の攻防が続き、前半13分7対7の同点。そこから浦添が、はとり六鹿にマンツーマンディフェンスを仕掛けた。はとりは六鹿のポストプレー、笹川のサイドシュートで攻略、前半を13対12でリードした。

後半、お互いに攻撃の糸口が見つからず静かにゲームが流れた。後半10分から、はとり六鹿のポストシュート、大畑の速攻やサイドシュートなどで得点し、4点差をつけた。その後はお互いに得点を取り合い、29対24で、はとりが勝利した。

明倫中学校　32（10-10、13-13、4-3、2-3、3 7mt 2）31　塩江中学校

立ち上がり、両チームとも高めの変則ディフェンスで、相手の攻撃リズムを崩す。序盤は明倫中がわずかなリードで試合を運び、中盤からは、塩江GK1番・森の好セーブ、2番・藤本、3番・山脇のロングシュートなどで応戦。前半終了、残り2分で9対9の同点となる。

後半に入っても、一進一退の攻防が続く。明倫中のディフェンス陣は高さのある壁を作る一方、塩江はGKが味方ディフェンスを後押しする堅守を見せ、両チームとも一歩も譲らない状況。中盤、明倫中オフェンスが塩江GKにボールをぶつけるアクシデントがあり、退場者が出たこの時、一時的に塩江中が3点をリードする。しかし、後半終了までに決着がつかず、延長戦にもつれ込む。

延長前半、両チームとも集中力を切らすことなく、持ち前のプレーを発揮しようと奮闘し、27対26と、明倫中わずか1点リードで折り返す。

後半、粘り強い攻防が続く。明倫中3番・久保がディフェンスからのカットインで同点に追いつく。29対29の同点。

延長戦でも決着がつかず、ペナルティーコンテストに入る。先攻は、塩江中。両チームともGKの好セーブがあり、4人目終了時点で2対2の同点。5人目、明倫中GKが塩江中を阻止する一方、明倫中が確実に得点し、32対31で明倫中が決勝進出を決めた。

熱戦を繰り広げた両チームに拍手を送りたい。

【決勝】

はとり中学校　23（11-6、12-14）20　明倫中学校

前半10分までに8対6と激しい点数の取り合いとなった決勝戦。明倫中は7番・内田のサイド、速攻などで加点。対する、はとり中は14番・六鹿のポストプレー、13番・大平のカットインなど多彩な攻撃で徐々に点差を離していく。3点差になったところで明倫中はタイムアウトを請求する。その後どちらも流れをつかめず、15対13の、はとり中2点リードで前半終了。

後半10分までに、はとり中はゲームの主導権を握り、6点差とリードを広げる。明倫中は6番・田中のポストなどで必死に食らいつくも点差を詰めることができず31対25で、はとり中が勝利。2度目の優勝を飾った。

女子

【準決勝】

けやき台中学校　18（7-11、11-6）17　十三中学校

地元の大声援を受け登場した、けやき台は、立ち上がり硬さがみられ、パスミスやシュートミスを続けた。十三は素早いパス回しから地家のポストプレー、林のカットインプレーなどで6連取して、前半10分7対2とリードした。けやき台も相澤、佐藤のカットインプレーでペースをつかんだが、十三GK好セーブもあり、前半11対7で十三リード。

後半、お互い消極的なプレーが目立ち、得点の決まらない展開。試合が動いたのは後半8分、けやき台が十三・林にマンツーマンディフェンスを仕掛けリズムを崩した。けやき台は、相澤、佐藤のカットインプレーなどで後半14分13対13の同点に追いついた。その後、一進一退の攻防が続いたが、後半22分十三に退場者が出て、けやき台キャプテン杉本のカットインプレーで1点リードし、決勝へ勝ち上がった。

神森中学校　21（8-13、13-6）19　平田中学校

前半、両チームとも様子をうかがう立ち上がり。先に動き出したのは平田中。神森中のミスやボール回しをカットするなどして、速攻で得点につなげる。その間、神森中はGK3人を場面によって起用し、特に1番・國吉は平田中の7mスロー4本のうち3本を阻止する活躍を見せた。

後半、立ち上がりは一気に流れが神森中になる。開始7分までに13対13の同点となり、その後は一進一退の攻防が続く。中盤17分から平田中は変則ディフェンスを仕掛け、神森中に揺さぶりをかける。しかし、神森中は間の広くなったスペースを使って突破を続け、着実に得点を重ねた。

最後まで手に汗握る展開だったが、最終的には21対19で神森中が逆転勝利し、決勝にコマを進めた。

【決勝】

けやき台中学校　23（11-6、12-14）20　神森中学校

神森中は、10番・高良から7番仲吉へのポストプレーで流れをつかもうとする。対するけやき台中は11番・相澤を中心として粘り強く守り、速攻で加点する。神森中のポストプレーが機能しなくなり、徐々に、けやき台中のペースになる。残り3分で2名の退場者を出してしまった神森中は流れをつかめず、けやき台中5点リードで前半終了。

後半の立ち上がり、神森中は3点差に追いつくも、互いに一進一退の攻防が続く。11分、けやき台中の退場の間に、神森中は4連続得点などで流れをつかむ。

残り5分、5点差をひっくり返し逆転した神森中は、けやき台中3番・佐藤にマンツーマン。しかし、けやき台中11番・相澤のカットインプレーなどで追いすがる神森中を振り切り、創部5年目で、地元開催での全国初優勝を飾った。

第4回女子ユース世界選手権団長報告

川上 憲太

第4回女子ユース世界選手権がロンドンオリンピック終了直後の8月16日から8月26日まで、モンテネグロのポドゴリツァとバールの2都市で開催された。大会中にロンドンオリンピック女子銀メダルに輝いたモンテネグロ女子選手団の歓迎セレモニーがバールの大会会場で行なわれるなど、モンテネグロとして力の入る大会となった。モンテネグロはオリンピック最終予選の初戦で女子日本代表が敗れた国でもあった。

今回で4回目となったユース世界選手権だが、各国ともユースカテゴリーの強化に力を入れているため、各大陸予選を勝ち抜いた20ヶ国のレベルの高い大会となった。

日本選手団は選手16名、スタッフ5名（団長・川上、監督・亀井、コーチ・石川、トレーナー・花岡、ドクター・有田）は、8月13日夜日本を出発、ヨーロッパがバカンスシーズンに入っている関係もあり、26時間かけてモンテネグロに入り、モンテネグロ空港からバスで1時間ほどでバール市に到着。宿泊ホテルはリゾート仕様で、食事その他に特に問題はなかった。予選ラウンド終了後、8月22日に一度ポドゴリツァに移動、決勝ラウンドの初戦を戦った後、再び8月24日に移動となり、このあたりは運営サイドの配慮があればコンディショニングももっとスムースであっただろう。これも国際試合ならではであろうか。大会運営はIHF、モンテネグロ協会の主催・主管で行なわれたが、とても日本の大会運営のスタンスからすると考えられない大変のんびりとした（ある意味大会慣れなのか）ものであった。しかし、トレーニング会場、移動バス、水・食事時間、試合開始等はほぼ予定どおりに進められた。

大会にはIHFロカ・マス副会長、ロオン・カリン競技委員長、プラウゼ審判長、タワコリ副審判長が参加、大会の運営・監督に当たっていた。私をはじめスタッフとも大会期間中には親しく交流を重ねた。閉会式にはハッサン・ムスタファ会長が出席、表彰を行なった。会長から「日本の決勝ラウンド進出」賛辞があった。

今大会はA～Dグループ5チームずつで予選ラウンドを戦い、各グループの上位2チームが決勝トーナメントに進出した。日本はDグループ（日本、ノルウェー、ブラジル、アンゴラ、ポルトガル）であったが、過去の実績から大会前からの苦戦が予想された。

亀井監督以下、まずは初戦のブラジル戦に勝利し、一つ一つ積み上げていくしか予選突破はないと覚悟して挑んだ。チーム全員が気持ちを一つにして戦い、何と前半を18対10で終了することができ、初戦に見事勝利。チームの雰囲気はやれるという自信に変わっていった。

第2戦、ノルウェー戦は善戦するも力及ばずであったが、この試合で高さ、堅さ、強さに対する感覚が体感できたのは大きかった。

ポルトガル戦はチーム全員の総力戦で、アンゴラ戦は相手のパスとスピードを心配したが、それを上回るスピード、テクニック、コンビネーションで突破、念願の決勝ラウンド進出を勝ち取った。

決勝ラウンド進出8チームのうち7チームがヨーロッパ勢で、他大陸代表では日本が唯一の進出となった。

（試合内容その他の詳細は監督・コーチからの報告を見ていただきたいが）、決勝ラウンドの第1戦はベスト4をかけたデンマークとの戦いとなった。予選ラウンドでのノルウェー戦の経験を生かして臨み、前半を17対15の2点差で折り返したが、後半、日本のフォーメーションを読みとったデンマークの堅いディフェンスに阻まれ、やや疲れの見え出したディフェンスをつかれ、25対31で敗れた。

第2戦のハンガリー戦も同様、堅い守りとパワーオフェンスに後半になって押し込まれ、25対30で敗れた。試合後、チーム全員で勝ちに挑んだ悔しさから、しばらく悔し涙で声も出ない状態であった。

最後となったフランス戦（7－8位決定戦）は前の試合同様、後半に突き放されかけながらも必死の守りから速攻で残り5分で同点に追いついたが力尽き、2点差で敗れた。しかし、世界トップのヨーロッパ勢に肉迫できたことは、監督、コーチ、選手にとって今後に生かせる戦いとなった。

亀井監督、石川コーチは、創意工夫と熱心な指導、丁寧なスケジュール管理を行ない、短期間の準備期間（合宿）の中で選手の特徴を十分に把握していた。特に最後まで勝利にこだわり、度重なるミーティングによる分析、戦略、戦術の徹底が行なわれ、すべての試合において的確な指示采配がなされていた。また選手管理も厳しく、行き届いたものとなっていた。決勝ラウンドに進んでデンマーク、ハンガリー、フランスとの戦いの中で選手自身も多くのものを体感でき、今後日本代表に選ばれる為の大きなステップになったものと確信した。今回の選手の中から次の日本を背負ってくれる選手が出てくることを期待すると同時に、今後の選手強化の益々の充実を肝に銘じた大会となった。

最終順位			
	優勝：デンマーク	**8位：日本**	15位：アンゴラ
	2位：ロシア	9位：韓国	16位：カザフスタン
	3位：ノルウェー	10位：オランダ	17位：ウルグアイ
	4位：ルーマニア	11位：モンテネグロ	18位：コンゴ民主共和国
	5位：ハンガリー	12位：ブラジル	19位：ポルトガル
	6位：スウェーデン	13位：チェコ	20位：パラグアイ
	7位：フランス	14位：クロアチア	



第4回 U18 女子ユース世界選手権に参加して

U18 女子ユース監督　亀井 好弘

第４回女子ユース世界選手権に参加させて頂きましたので、ご報告申し上げます。

1．大会までの準備

８月の世界選手権までに関係各位のご協力により、５泊６日の強化合宿を２回実施させて頂きました。その合宿で、世界の大型選手と戦うために準備したことについて報告致します。

1）精神面及び生活面
　日本代表としての心構え、精神的な強さの必要性、食生活等

2）遅攻
　①いくつかのきっかけから展開し、ワイド攻撃によりシュートチャンス（２対１）をつくる
　②ポストの視野外の動きを中心としてシュートチャンス（２対１）をつくる
　③コンビネーションプレーでシュートチャンス（２対１）をつくる

3）DF面
　①運動量のある大きなけん制を使った６－０ディフェンスシステム
　②運動量のあるトップを中心に守る５－１ディフェンスシステム
　③アウトに追いやる４－２ディフェンスシステム

4）速攻
　①フロントコートに速く運ぶ縦パス
　②ポストにボールを入れた時の展開方法
　③クイックスタート

5）GK
　①高打点シュートに対するキーピングからのボール出し

この準備段階で、重要であったことは、２点です。

①目指している全体的なチーム像の把握と局面における役割の理解

②把握、理解したことに対する表現力（行動力、判断力、実践力）

与えられた時間の中でトレーニングの質を高めようと努力しましたが、全員が理解し行動できるまでには、あまりにも時間が足りませんでした。しかし、選手たちは全員が素直にトレーニングに励み、スタッフの意向をイメージしてトレーニングを終えることができました。８月 13 日、全日本女子ユースチームは決勝トーナメント進出（ベスト８位内）を最低の目標として成田を出発しました。

2．大会期間中

大会は各大陸予選を通過した 20 チームを４グループに分け、各グループ５チームの予選リーグを実施し、上位２チームが決勝トーナメントに進出することができます。日本が属するＤグループのランキングは、上位からノルウェー、ブラジル、アンゴラ、日本、ポルトガルの順で、決勝トーナメントに進出するためには、初戦のブラジル戦が最も大切な試合でした。前半 10 ～ 15 分で、相手のチーム戦術と個人スキルの特徴さらに審判の特徴をつかみ、それをもとにゲームプランを立てることを指示し、選手をコートに送り出しました。荒削りではありますが、バックコートプレーヤー２人とポストプレーヤーの３人は 185 ㎝程の長身で日本が苦手とするタイプでした。前半中盤から、ポストに対する守りの指示をした後、相手のミスから速攻で一気に得点し３点差で勝利することができました。その後、ノルウェー戦には力負けしたものの、重たい身体を有効に使いながら身体をあずけて力強いディスタンスシュートを放つポルトガルには、途中から５－１ディフェンスで勝利することができました。予選リーグ最終戦のアンゴラは、フィジカルが高く１対１を果敢に攻撃し突破してくるのでボール下を厚くし、けん制ディフェンスからのクロスアタックとボールカットで勝利しました。この結果、予選リーグ２位で決勝トーナメントに進出することができました。ベスト４をかけた戦いは、デンマークでした。試合前日のミーティングで戦い方と個人の役割を確認し、前半は日本の OF が機能しシュートチャンス（２対１）をつくり２点リードで終了しました。しかし、後半に入り、視野外の動きを警戒され残念な逆転負けとなり、５～８位決定戦にすすむこととなりました。５～８位決定戦初戦のハンガリー





レーナーの献身的なサポート、また森村キャプテン（大体大）のリーダーシップなどにより、短期間でまとまりのあるチームになりました。選手たちも、本当に素直でスタッフのアドバイスに対する表現力が高く、大会期間中にもいくつかの課題を与えながらトレーニングしましたが、日々成長していることを実感することができました。決勝トーナメント進出を最低目標とし、準備から大会まで歩んできましたが、私としては最低限の役割を果たすことができた満足感よりも、決勝トーナメントに進出したあと、

は、得点後のクイックスタートをほぼ1試合すべての時間帯でしかけてきて、日本のディフェンス隊形が整わないうちに、強引な突破で得点され、敗戦しました。最終のフランス戦では、威力のあるシューターと長身のポストプレーヤーに悩まされながらも終盤まで1点を争うゲームとなりましたが、最後は私のミスで惜敗し、8位という結果で大会が終了しました。

3．大会を終えて

今回、ベスト8入りしたヨーロッパチームは熱狂的なハンドボールサポーターに支えられ、ユースとは思えない完成度の高い試合を展開しました。日本もハンドボール協会や石川コーチのご尽力により、大使館の方、さらには現地の日本企業の人々、モンテネグロまで駆けつけた選手の保護者、大会期間中に日本のサポーターとなった現地の子供たちが、国旗を会場に飾り応援してくれました。この国旗に、国を代表しているという認識をさらに強め、強い気持ちで試合に臨むことができ、日本らしいハンドボールを披露できたと感じています。また、川上団長、石川コーチ、有田ドクター、花岡ト

1勝もできなかった悔しさが大きく残りました。決勝トーナメント進出は、日本チーム以外は全てヨーロッパ勢でしたが、どの試合も勝つチャンスはありました。チームをうまくコントロールすることができず、監督として責任を感じています。ただ、スターティングメンバー7人の平均身長が163㎝という小柄な日本でしたが、180㎝を超える他国ヨーロッパチームに対して、勇猛果敢にチャレンジできた選手を誇りに思います。勝ちきることは簡単なことではありませんが、取り組む方向性さえ正しければ、日本の将来は明るいと思うので、今回、忘れてきたものを次のカテゴリーで取り返してほしいと心から期待しています。

最後になりましたが、今回の世界選手権のために各地区で実施される国体ブロック予選の日程を変更して頂いたこと、また大学生においては西日本インカレ中でありながらも所属選手を派遣して頂いたこと、日本ハンドボール協会の方々には大会出場における事務手続きや国際大会ならではの急なトラブルにも迅速に対応して頂いたことなど、本当に多くの方々からご支援、ご協力賜り、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

女子ユース世界選手権に出場して

U18女子ユース主将　**森村 美紅**（大阪体育大学1回生）

初めてのモンテネグロでの世界大会。私達は期待、緊張、不安な気持ちでいっぱいでした。飛行機の中でアナウンスでの「日本代表のハンドボールチーム」と応援いただきました。その時、やるぞという闘志がわいてきたように思います。

亀井監督のもとでハンドボール界に新たな歴史を作ろうとチーム一丸となり戦ってきました。国内では通用するプレーも世界の高さやパワーで守られてしまいましたが、OFではカットインや視野外からのプレー、DFでは上から打たれないように高くあたり、足を止めないフォローDFで守って速攻といった運動量の多さで戦ってきました。

試合前のミーティングでは選手だけで話し合い、どのように守りどのような攻め方を狙っていくのかを決めて、話し合ったことを監督と話し合い、チームでミーティングするといったことを繰り返しました。ミーティングを繰り返した結果、なにを狙っていくのかといったことがチーム内ではっきりし、全員で勝利に対して一つになっていけたと思います。

決勝リーグに進むことができ世界の相手と一試合でも多く試合ができ、目標としてきたベスト8に入れたこと本当にうれしく思います。

私たちが不安をなく試合に集中できたのは現地にて、たくさんのサポートをして頂いたからこそです。また現地に住まれている日本人の方や各地でお会いした方が応援して下さったおかげであると思います。そして共に戦って下さった川上団長、私達の相談を聞いて支えて下さった花岡トレーナー、体調管理や通訳としていろいろな事を交渉して下さった有田ドクター、私達の心の支えになって下さった石川コーチ、全力で私達にぶつかって下さった亀井監督、本当にありがとうございました。

ハンドボールが出来る喜びを忘れず感謝し、日々努力して頑張っていきたいと思います。

戦　評

8月23日（木）
[準々決勝]
日本　25（17－15，8－16）31　デンマーク

決勝トーナメント（準々決勝）の初戦は、予選Cグループ1位のデンマークとの対戦。今までと同じスターティングメンバーでスローオフからスタート。開始35秒佐々木のロングシュートで1対0、デンマークもロングシュートで1対1、再び佐々木のロングシュートで2対1、デンマークポストシュートで2対2と7分まで日本が得点するとデンマークが得点する1点差の攻防が続く。7分40秒田村の速攻、森の速攻、田村のサイドシュートで7対4とする。デンマークは佐々木、田村、佐々木とマンツーマンディフェンスで日本のペースを乱そうとするが、日本は水落の好セーブ、佐々木のロング、築山のカットインなどで、一進一退の攻防が続く。25分三田のカットイン、築山速攻で2点差リードを保ち17対15で前半を終える。

後半に入ると、デンマークの大応援団の声援もあり、4分には18対19と逆転される。日本の攻撃を予測しながらの防御からの速攻、ロング、ポストと力強い試合運びに持ち込まれ、9分には19対23とされる。日本も谷のポスト、佐々木のミドル、田村のカットインなどで追い上げるが、16分から5点連取され22対27。日本はディフェンスシステムを6－0から5－1に変え流れを変えようと粘り速攻へも走りきったが、ノーマークを相手GKの好守で阻まれ、ディフェンスでは強い押し込みなどで点差が開いてしまいゲームセットとなった。

この試合のベスト選手には佐々木が4度目の受賞をした。
【個人得点】佐々木：10点、田村：4点、築山・森：3点、谷：2点、三田・中島・河野：1点

8月25日（土）
[5-8位順位決定1回戦]
日本　25（14－15，11－15）30　ハンガリー

日本は今までと同じスターティングメンバーで、スローオフからのスタート。開始早々、河野のサイドシュートで先制するとハンガリーも素早い攻撃からポストで1対1とする。18分までは1点を争う攻防を展開し、19分に河野がこの試合初めて2点差にするシュートを決めて11対9とリードした。その後、ハンガリーは体格差を活かした強引な1対1からのカットインやロング、速攻などで加点。日本にイエローカード2枚を与えて26分には12対15と逆転。日本はGK水落の再三に渡る好守と田村から佐々木へのスカイプレーなどで追いつこうとするが14対15で前半終了。

後半は、2点差から1点差に追いつくが、再び2点差という展開が続き、7分に16対19と3点リードされてしまう。そこから日本も追いつこうと必死にノーマークを作るが、相手GKに阻止され、9分には17対21と4点差になる。そこで日本は一度全員メンバーチェンジし3－2－1ディフェンスで18対21と追い上げたが、ハンガリーの3点連続の速攻で24対19と5点リードを奪われる。18分に佐々木が2分間退場したのをきっかけにロングシュートやポスト攻撃され、23分には22対30と点差を広げられた。その後中島がトップディフェンスで活躍し、3点連続得点に結び付け25対30で試合終了。

この試合のベスト選手には、田村が初めて選ばれた。
【個人得点】佐々木：8点、河野：7点、田村：6点、三田：2点、谷・森：1点

8月26日（日）
[7-8位順位決定戦]
日本　26（16－13，10－15）28　フランス

日本は、この大会全て同じスターティングメンバー。スローオフからのスタートとなった。開始50秒でフランスのロングシュートが決まり先制される。しかし、森のカットインですぐに1対1の同点。フランスに先行されるが、4分20秒に3対3の同点にすると今度は日本が先行する展開になり、9分45秒フランスの退場を谷が誘い、佐々木が決めて7対5の2点リード。そのまま15分に佐々木の7mTで9対6の3点差。19分25秒には森の速攻で12対8の4点リードに広げる。27分にはフランスに2点差まで追い上げられるが、水落の再三の好セーブで16対13で前半終了。

後半になると佐々木にマンツーマンディフェンスを敷かれコンビが微妙に合わず、7分45秒に17対17の同点にされる。日本はタイムアウトを取り、役割の確認を行う。11分までは1点を争うシーソーゲームとなるが、13分20秒でロング、速攻で19対22の3点のリードを奪われる。日本も森、谷、田村の速攻、カットインなどで追い上げる。24分30秒には25対25の同点に追いつく。その後、1、2点を争うシーソーゲームになり、27分47秒25対27でフランスがタイムアウトを取った後、田村の速攻で28分40秒には26対27と1点差まで詰め寄る。同点に持ち込むムードであったが29分45秒、水落の好セーブのリバウンドを奪われ惜しくも敗れた。

この試合のベスト選手には、今大会再三のピンチを救ったGK水落が選ばれ、ベスト8の表彰もあり選手一人ひとりに記念品と賞状が手渡された。
【個人得点】佐々木：10点、森：6点、田村：5点、築山・谷：2点、河野：1点



第5回 男子ユースアジア選手権

5th Asian Men's Youth Handball Championship

2013年世界選手権出場権を獲得

優勝：カタール　準優勝：日　本　3位：韓　国　4位：バーレーン　5位：サウジアラビア　6位：イラク
7位：シリア　8位：イラン　9位：クウェート　10位：チャイニーズタイペイ　11位：ウズベキスタン　12位：オマーン

男子ユース団長　近森 克彦

初めて団長としてユースチームを率い、アジア選手権に臨みました。以前はスタンドから或いは結果を聴いての批評で済んだ客観的な立場から、言い訳が許されない立場となりました。

今大会は優勝は逸したものの、参加12カ国中の2位で終え、来年開催の世界選手権への出場権を得ることが出来ましたことを大変嬉しく思っています。

参加した選手は他国の選手と比較しても技術的には全く劣ることはありませんが、体力面、強い精神力にはまだまだだろうと思えます。チームは中東諸国には全て勝つとの目標を掲げ大会に臨み、残念ながらカタールには敗れましたが、当初の目的は達成出来たのではと思います。カタールは相変わらず帰化選手中心で190センチ以上を多く揃え、ヨーロッパスタイルで高さ、力強さは他の中東諸国にない構成となっています。しかし来年の世界選手権ではそのスタイルを打破しなければ勝負出来ません。ユースチームは主にヨーロッパに於いても技術的にもそう高いとも思いません。しかし体力的にはカタールに見られる力強さは備えていることは間違いないと思います。その為、日本は更に体力的には体幹を鍛え、全体のスキルアップを図り、更には俊敏性を高める事、1対1に於ける攻防をこなせるようにする事で、目標とする8位以内に近づけると確信します。そういった意味で、最後のミーティングの中で選手個人個人に対して、監督他スタッフ確認の下、今後強化すべき項目をメモにて渡しました。

ユースの選手のほとんどは国体が終わればシーズンオフになります。これから来年の大会まで強い意志を持ち、休まずトレーニングを続けていけるかで目標が見えてくるのです。

NTS、アカデミーで選ばれた選手でもトレーニングを継続しなければ、元の木阿弥となります。地道にトレーニングを続けた選手だけが再び代表に選ばれるのです。所属する監督、コーチにはぜひ協力をお願いいたします。NTS、アカデミーなど、系統だったシステムによる選手の発掘が出来つつある今、シーズンオフとなる時期の課題を検討する必要があると考えます。

終わりに在バーレーン在留邦人の方々の心からの応援に感謝します。今後も中東地域での大会が増えると思われますが、そのため中東地域にベースキャンプとなる国が必要となるなと強く感じ、関連者全員で対策を考えていく必要があるのではと痛感しました。

最後に、現地で協力・支援戴いた方々、及び選手を送り出して頂いた関係者に御礼申し上げ報告とさせて頂きます。

男子ユース日本代表監督　滝川一徳

【はじめに】

おかげさまで9月6日からバーレーンにて行われましたアジアユース選手権におきまして、来年8月にハンガリーで開催されます世界ユース選手権大会への出場権を獲得することができました。日本協会の皆様方はもとより、選手所属チームの先生方、ご家族、そして現地において「準優勝おめでとう」「感動をありがとう」の横断幕や選手1人1人の名前の入ったプラカードを持って、熱い応援を下さった在留日本人の方々、また2000年から始まったNTS、2008年からのジュニアアカデミーに携わってこられた多くの方々をはじめ、選手にあいさつの仕方やボールの握り方からご指導下さったジュニア期の指導者の方々、チームを陰に陽に支えて下さった多くの皆様方、日本で熱い応援を下さった方々、すべての皆様の「思い」が実を結んだ結果であります。

この場をお借り致しまして、心より厚く御礼致します。本当にありがとうございました。

【チーム目標】

2013年世界ユース選手権出場権獲得

【具体的目標】

中東諸国に全勝できるチーム作りをし、宿敵韓国に挑戦する

【強化施策】

チーム目標を確実に成し得るために、私が監督として出場させて頂いた過去の3大会（2008アジアユース選手権7位：ヨルダン、2009ユースオリンピック予選2位：韓国、2010アジアユース選手権7位：UAE）のデータ（表1・2）を下に以下の通り強化方針を策定。

①対中東チームにおける過去の失点データから9mエリア内をスイッチを多用し厚く守り、かつ積極性のある強固な6－0DFの構築
②対中東チームにおける過去の得点データからDSに頼らない的確なポジショニングと素早いパスワークで創り出す広いスペースで勝負できる攻撃の構築
③日本人選手のスピードとタクティクスをフルに活かし、帰陣の遅い中東チームに対して「速さ」と「緩急」を使った素早い攻守の切り替えができる速攻スタイルの構築
④過去の失点データから中東チームに対し速攻での失点をさらに抑えられるバックチェックの構築
⑤選手の将来を見据え、意識的習慣から無意識的習慣として獲得できる基本のマスター
⑥「体格で勝てなければ体力で勝つ」を念頭に置いた徹底した体力強化
⑦「素直さ」「感謝の気持ち」などアスリートとして必要な人間教育

【選手選考について】

1. シュートバリエーションが豊富でスピードがあり、得点力・経験値の高いBP
2. 中央を守れる大型で運動能力の高いポストおよびディフェンダー
3. 緩急を使い分けられるサイドのスペシャリスト
4. 上記１～３を優先した上で、将来性が期待できる大型選手

【強化日程について】

2011年度　10月13日～16日(3泊4日)、12月1日～7日(6泊7日)、2月23日～26日（3泊4日)、3月5日～9日（4泊5日)

2012年度　4月23日～27日(4泊5日)、5月20日～25日(5泊6日)、7月11日～17日（6泊7日)、8月20日～26日（6泊7日)、8月28日～30日（2泊3日）［9回すべてANTCにて実施］、8月31日～9月4日（遠征合宿：バーレーン）

上記の通り2011年10月に招集をして以来、国内合宿を計9回（延べ48日)、現地に入りトレーニングマッチを2試合実施して大会に臨んだ。

【前大会の課題：現U21主力選手】（表1・2参照）

① OF・・元木（日体大)・久保（早稲田大）という強烈なアタッカーの存在があったものの、確率のよくないDS頼みの攻撃スタイルがセットOFの得点源となっていた。その結果、2人の出来が試合結果を大きく左右してしまった。
（全体でDSの割合29%、PS・BT・SS・7ｍの合計が30%）

② DF・・中央を守れる大型選手が不在であったため、攻撃的3－2－1DFを主に戦った。中東の大型選手に対しDSは防いだものの、フィジカルの弱さも手伝い、確率のよい失点があまりにも多すぎた。(PS・BT・SS・7ｍでの失点合計が全体の78%)
（中央4人：183㎝、179㎝、178㎝、180㎝）

【今大会の成果】（表1・2参照）

① OF・・田中、徳田、藤という運動能力が高く1：1に強い選手を攻撃の中心に置いた結果、素早いパスワークとポジショニングからの強い1：1をきっかけに連続攻撃がよく決まり前大会のチームと比較するとBTでの得点が増え、確率の高いエリア際での得点率が高くなった。
（PS・BT・SS・7ｍの合計51%と前回より20%以上アップ）

② DF・・ジュニアアカデミーの象徴である玉川、安倍をはじめ、中央を守れる大型選手が多く存在したため、中東選手特有の力任せなプレーに対応できる安定した6－0DFを主に戦えた。前回までのような確率のよい失点を最小限に食い止めることができた。
（中央：198㎝、191㎝2人、188㎝3人、186㎝2人、178㎝）

表1　日本得点　シュート種別比率

	2010	2012
DS	29%	15%
SS	17%	10%
PS	2%	6%
BT	4%	25%
7m	7%	10%
FB	33%	30%
QS	8%	4%

表2　日本失点　シュート種別比率

	2010	2012
DS	9%	51%
SS	24%	11%
PS	34%	11%
BT	14%	9%
7m	6%	5%
FB	13%	12%
QS	0%	1%

DS・・ロング、ミドル　PS・・ポスト　FB・・速攻
SS・・サイド　BT・・カットイン　QS・・クイックスタート

（PS・BT・SS・7ｍでの失点合計が全体の36%と前回の半分以下に）

③ DFが安定したことにより数の少ないパスでの速攻がよく決まった。

【まとめ】

以上のように、確率の高いエリアでの失点が半分以下となり、逆にそのエリアでの得点が20%アップしたことが今回の結果に結びついたと考える。

6－0DFの中央を守る4人のうち3人を攻撃ではポストと両サイドに配置、両サイドを守る選手2人と2枚目のDF1人をOFではBPに配置する構想が上手く機能した。

今後の課題として、中央2枚を守れるBPを育成する必要がある。特に安倍に期待。

【強化期間における感想】

前途の通り、9回の強化合宿を実施しましたが、選手は厳しいトレーニングに本当によく耐え、頑張ってくれました。「強化施策」の通りチーム作りを進めてこれたのも選手の「素直さ」「ひたむきさ」があったからだと思います。助安キャプテンを中心に田中らがよくチームをまとめてくれました。何度も何度も言い続けてきた「ルーズボール＝0.5点」つまり「攻撃成功率が50%とするならルーズボールを2回拾えば1点」という言葉の通り練習中からそのボールに対する執着心、「心・技・体」ではなく「体→心→技」、それは「体力を鍛えることは自分との戦い、己に勝つことが心を鍛える」という考えの下、辛い体力トレーニングに必死に食らいついてきてくれた精神力、基本の習慣化を獲得するに向けて繰り返し励んだ基本練習…。時には厳しい言葉で選手を叱咤したこともありました。

合宿の度に、大崎電気さんにはご協力を頂きました。チームが大会や試合前であろうと岩本監督が「こちらもいい練習になります」と快く引き受けて下さり、練習後には大崎電気所属のナショナル選手が、ポジション別に選手を御指導下さいました。日本代表NEOチームとのトレーニングマッチも中山コーチが「お互いにやっていこう」と快く引き受けて下さいました。世界最終予選前の女子代表チームとは、短時間のゲームを何本も繰り返し行い、黄監督の熱い指導に必死に食らいつく女子代表選手を目の当たりにし、国を背負って戦うことがどれだけ大変かを選手は感じたことでしょう。津川強化本部長、松井男子強化部長も合宿の度に、スタッフ・選手に激励下さり、田口Jr強化部長のアンダーカテゴリー強化方針の下、ANTC田中・市來・大城コーチにもたくさんの助言や御指導を頂きながら強化を進めることができました。他にも、ここには書ききれないほど、たくさんの方々に支えられてきた強化期間でありました。3泊4日の合宿を多くて3回程度しか実施できずに大会へ入らざるを得なかった過去と比べ、我々スタッフはもちろん、選手がどれだけの「思い」を背負いながらバーレーンに向け出発できたかと思うと、感謝の気持ちでいっぱいでした。

【大会直前遠征合宿】

予選リーグは初戦が大きな鍵を握るため、それに向けての準備は神経戦でもあります。

ユース代表チームはU16で日韓戦を経験しているだけで、体格のある中東勢との対戦はもちろん初の体験です。慣れない食事、体感したことのない中東の気候、3週間近くに及ぶ大会期間、ど

れもこれも初の体験。さらに他国の情報は当然皆無であり、ここからがアジアでの戦いのスタートになるわけです。残念ながら全くそのような経験をできず、いきなり大会に入り、3試合目ぐらいにようやく体格のある選手との戦い方に慣れ、調子が上向きになる頃にはすでに厳しい星取りとなってしまっていた過去のチームと比べ、今回のチームは大変恵まれていました。先に現地に入り、2試合も経験ができたのです。2試合も？と思われるかもしれませんが、2試合だけでもさせて頂けることがどれだけ貴重かを十分に理解しておりますし、その試合を2試合とも1点差で勝利できたことはチームに自信と勢いをつけてくれました。小さな田中選手や徳田選手が大きな選手と対戦し、試合後に感想を聞くと「楽しいです」と頼もしい一言が返ってきました。

チームのムードは上向きで大会に入ることができました。

【まさかの誤算】

大会前、私が把握していた世界選手権への代表枠は「3」、前途の通り、このチームの目標は、あくまでこの世代初の1985年以来遠ざかっている男子アンダーカテゴリーでの「世界選手権出場」。確実にそれを達成するには、中東勢に全勝することが大きなアドバンテージになると考えていた我々スタッフ。ところがテクニカルミーティングで発表のあった代表枠は「現段階で2」。選手には「3が2になったところで我々の目標は変わらない」とだけ話しました。選手の反応は？と少々気にしていた私に、選手から「優勝すればいいんですよね」との答え。10ヶ月前、泣きそうな顔をしながら体力トレーニングをしていた選手達が、短期間でこれほどまでに前向きな強さを持てるかと、あらためてこの世代から強化していくことの大切さを実感致しました。

【大会において】

迎えたサウジアラビアとの初戦、中東チームとの戦い方のコツをトレーニングマッチでつかんだ選手は、多少の堅さがあるものの後半しっかり突き放し、最も重要な初戦を白星でスタート。2戦目は初日にクウェートを倒したイラク。数年前では考えられない程、イラクの成長には驚かされました。しかしながら山口コーチの相手の弱点を突く作戦が見事に的中し、途中から相手も戦意を喪失し2連勝。3戦目は連敗中のオマーン。ベンチ入りの選手全員を投入し、変わった選手が得点を決める等、活躍し、3連勝で休養日を迎えました。この時点においてグループAで日本・カタール、グループBの1位バーレーン、この3チームの準決勝進出が決定し迎えたグループ1位を決めるカタールとの全勝対決。前半は狙い通りにゲームが展開できたものの、後半は体力の消耗が激しく、途中高さのあるDSを打ち込まれ初の黒星。私が過去の経験から最も心配していたことは、現地に入ってから一度も負けたことのないチームが、1試合敗れたところから一気にペースが乱れて今後の試合に影響することでした。あくまで我々の目標は「世界選手権出場」なのですから。選手は悔し泣きし、ホテルに到着してからもまだ涙を流している選手がいました。私は正直、胸がいっぱいでした。過去にここまで感情を表に出せたチームがあっただろうかと。私はもう一度選手をロビーに集め、自分の事を正直に話しました。「実は2年前に監督を辞めたいと男子強化部長に伝えていたんだ。でもあと1回と推され引き受けさせて頂いた。なぜかわかるか？　俺はお前たちだから引き受けたんだ。お前たちと世界選手権に行きたいからだ。そんなお前たちの負けて泣く顔は見たくない。世界選手権を決めて泣くまでもう泣くんじゃない」そう話す私が泣き出しそうでしたが、私の顔を見る選手の鋭い目を見て安心しました。準決勝につながる試合をという目的の下、チームは勢いを取り戻し、いいムードでクウェートに勝利。

いよいよ大一番。大会入り後、我々スタッフに、そして選手にたくさんの愛情と叱咤激励を下さった近森団長が決戦当日選手18人全員に日本食料理店からおにぎり3個と鳥の唐揚げ3個が入った弁当を差し入れて下さいました。毎試合前に実施していたホテルでのミーティング。「世界への扉は握った。あとはお前たち18人の気持ちを1つにして全員で押し込み、こじ開けてこい！」ホームの異様な雰囲気の中、後半5点ビハインドの中でも選手は、よく耐え、食らいつき、田中を上に置く変則5－1とGK友兼の好セーブで延長へ。延長は終始リードし、ノータイムフリースローをGKが阻止し1点差で試合終了。選手は私との約束通り、勝って泣いてくれました。私も思いっきり泣かせて頂きました。

在留日本人の方々も50名近く応援にかけつけて下さいました。小さな子供が「ニッポン！ニッポン！」と大きな声で、笑顔で私たちの背中を押してくれました。

口から出る厳しい言葉とは正反対の優しさでスタッフ・選手をフォローし、大会中、大切なアドバイスを何度も下さり、チームを導いて下さった近森団長。「番長」らしく常に選手に一番近いところで接し、的確な戦術眼で相手を分析し、指導してくれた山口コーチ。自分の役割に徹してくれ、大会中のトレーニングを計画、実行し、選手の気持ちになって的確なアドバイスをしてくれた内記コーチ。大きな怪我人を1人も出さず、万全なコンディショニングをして下さった闘魂注入の飯田トレーナー。皆と抱き合い流した涙と松ヤニだらけの手で胴上げしてくれた選手の思いは、生涯忘れることができません。

【今後に向けて】

決勝戦、またしてもカタールに敗れてしまいました。しかし我々スタッフは、大会中何度も近森団長が口にされた「STEP by STEP」とこの試合をとらえ、新たに挑む世界への挑戦の第1歩だと考えています。

来年8月、ハンガリーでの世界選手権に向け「まだ10ヶ月ある」ととらえるか、「あと10ヶ月しかない」ととらえるかで変わってきます。「あと10ヶ月しかない」その心構えで新たなチャレンジをして参りたいと思います。近森団長が選手18人全員の課題を書いた手紙を帰国の際、1人1人に手渡して下さいました。選手はしっかりとトレーニングすることと思います。帰国の際は、





多くの方々が空港にお出迎え下さいました。

私自身、U21・U19と代表チームに携わらせて頂いてからお世話になった緒方、蒲生、西窪元強化部長はじめ多くの方々、ユース代表スタッフとして共に戦ってきて下さったU16団長の志々場先生、監督・コーチの岩本先生、阿部先生、この世代をU16で指導された小波津先生、鳥本先生にあらためて感謝致します。本当にありがとうございました。

世界選手権に向けさらなる努力・精進を重ねて参ります。今後ともユース代表チームに対しまして御支援、御指導を賜れますよう宜しくお願い致します。

戦　評

■9月15日（土）[決勝戦]

日本　24（13-14、11-14）28　カタール

世界選手権への出場権を獲得し、未来への１ページという次なる目標に向けて臨んだ決勝戦。相手は予選リーグで苦杯をなめたカタール。午前、午後の２回のミーティングで相手に対する戦い方と、今まで積み上げてきたことの確認をし試合に臨んだ日本チーム。キャプテン助安、玉川をDF中央に配置し、今野をサイドに置く準決勝までとは違ったスターティングメンバーでスローオフ。立ち上がり先取点を許すも、徳田のミドル、今野のサイド、助安の２連続ポストで４連取。４対１と好スタートを切る。その後、高さのある相手５－１DFを攻めあぐね４対７とリードを許す。ここで日本はタイムアウト。ここから６対７、７対９など常に退場者を出し、一人少ない状況ながらも食らいついていく。ここで斉藤が３回目の退場でレッドカード。苦しい戦いを強いられる。その後は一進一退の攻防が続く。田中の７m、徳田のミドルシュートで粘り強く戦い、前半を13対14の１点ビハインドで折り返す。

ハーフタイムでクロスアタックDF、３－２－１DFで仕掛けることをゲームプランとして持つことを確認。後半戦に臨む。立ち上がりはお互い守り合いの展開から金内の闘志溢れるDFから徳田、玉川らがよく走り17対16と後半10分で逆転。ここで相手チームのタイムアウト。18対17からノーマークシュートミスが出始め、体格のある選手に打ち込まれるなど試合の流れをつかめず18対23と５点のビハインド。タイムアウト後３－２－１や変則５－１などDFシステムを変え、藤、徳田、田中らの速攻で得点を重ねるものの、相手大型BPに最後は打ち込まれ24対28で試合終了。２位で全日程を終了した。

試合前から多くの在留日本人の方々が手作りで選手１人１人の名前の入ったプラカードを掲げ、小さな子供達が日の丸の国旗を手に「ニッポン！ニッポン！」と力強く応援して下さった。試合後は「準優勝おめでとう」「感動をありがとう」など手作りの横断幕が掲げられ、選手はあらためて感謝の気持ちと、世界選手権に向けてさらなる精進を心に刻み込んだはずである。閉会式後も応援にかけつけて下さった方々と記念撮影をし、全員で整列し、御礼の言葉を述べるなどたくさんの思いを胸にこの大会を終えた。「ハンガリーにも応援に行きます」そういって下さった方々や、未来を夢見る子供達の前で、最後まで諦めず、食らいついた選手は立派であった。この大会で体験できたことを糧に世界選手権に向けさらなる精進をしたい。

【個人得点】徳田：９点、田中：５点、助安：４点、藤・今野：２点、相澤・玉川：１点



大会を振り返って

大会主管校（呉高専ハンドボール部顧問）　河村 進一

第47回全国高専体育大会・第39回全国高専ハンドボール選手権大会が8月21～22日、広島県の呉市総合体育館オークアリーナにて開催されました。今年の大会は、7月の地区大会を勝ち抜いてきた函館、秋田、東京、鈴鹿、石川、大阪府大、徳山、米子、高知、熊本、北九州の11校に開催地の呉を加えた12チームで行われました。このうち、函館、東京、大阪府大、徳山、熊本の5チームが昨年に引き続き地区代表として勝ち上がってきたチームです。

予選リーグ第一ブロックでは、函館高専が昨年度全国大会3位の実力を発揮して抜け出し、第二ブロックは大阪府大高専が高知高専に競り勝ちました。第三ブロックは地区大会予選リーグで徳山に勝利している米子高専が、第四ブロックは昨年の全国大会予選リーグで徳山と対戦、今年も予選リーグで対戦することになってリベンジに燃える熊本高専熊本キャンパスを振り切って徳山高専が決勝トーナメント進出を果たしました。準決勝は、函館高専対大阪府大高専の強豪対決、米子高専対徳山高専の中国地区同士の対決の2試合となりました。両試合とも息の詰まるような接戦で、最後までどちらが勝ち進むかわからないような試合展開でしたが、残り数分のところで大阪府大高専と徳山高専が抜け出しました。決勝戦は、最初両チームともなかなかリズムがつかめず点の入らない時間もありましたが、前半途中から落ち着きを取り戻した徳山高専が有利に試合を進め、前半終了間際や後半途中にスカイプレーを成功させるなど、相手を圧倒して2年連続3回目の優勝を手にしました。

今年度の大会では公式の試合以外にも、2つの試合を行いました。1つは、高専ハンドボール史上初めてとなる高専女子の試合、もう1つは6年ぶり開催となるOB交流戦です。

女子の試合は、男子の決勝の前にエキシビションマッチとして行いました。高専女子チームは現在のところ鈴鹿、有明、沖縄の3チームが日本ハンドボール協会に登録しています。ただし、高専女子チームとしての公式な大会は今までになく、高体連の試合が終わったあとの高専4、5年生は目標を失ってしまうというのが現状です（注：多くの地区で高専登録されたチームは高体連の大会にも重複して参加可能になっており、過去には高知高専男子チームがインターハイに出場したこともあります）。今回の女子大会は非公式の試合であり学校等からの補助もない中で、鈴鹿高専と有明高専の2チームに参加いただきました。有明高専は九州沖縄地区大会でオープン開催された沖縄高専との試合に勝っており、鈴鹿高専対有明高専の事実上の全国大会となりました。結果は鈴鹿高専が後半に主導権を握って13対8で有明高専を下し、第一回の女王となりました。

OB交流戦は全国高専ハンドボールのOB組織である球友会主催で8月21日の予選リーグ終了後、行われました。地方での大会かつ平日開催であったこと、さらにOB交流会開催の周知が遅くなってしまったことも重なり、1チーム分の人数しか集まりませんでしたが、全国大会出場校の補欠チームとの試合を通して、楽しい時間を共有できたのではないかと思います。球友会には女子エキシビションマッチの審判・運営もしていただきました。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり、ご支援ご協力いただきました、日本ハンドボール協会、広島県ハンドボール協会、呉ハンドボール協会および全ての役員・スタッフ・関係の皆様にお礼申し上げ、大会の報告といたします。

優勝：徳山高専

徳山高専監督　池田 光優

今回の全国大会は、昨年までと異なって昨年度優勝校という肩書きがある状態での大会参加となりました。昨年はダークホース的な存在で一気に優勝まで行けましたが、今回は他のすべての高専が「打倒徳山！」の意気込みで大会に参加したと思います。今回の大会は予選から強敵といえるチームとの対戦ばかりで、ほとんど選手交代もできない試合が多かったです。予選リーグでは2試合ともエースの池岡選手にマンツーマンディフェンスを行われたので、最後まで5対5のゲームになるというような状態で選手たちも非常に疲れていました。決勝トーナメントでも、非常に緊迫した試合が続きました。準決勝の対米子高専戦では残り時間3分ぐらいまで2点差で負けていた様な試合で、最後の10秒までどち



らに転ぶかわからない試合でした。決勝の大阪府立大高専戦でも最後は得点差こそつきましたが、相手チームのシュートミスに救われた場面が多々あったためであり、非常にしんどいゲームとなりました。

そういった中、一戦一戦薄氷を踏む思いで戦い、勝利をたぐり寄せていった部員たちに拍手を送りたいと思います。昨年とは違って、連覇しただけではなく「本当に優勝できた！」と実感できる大会でした。

最後に本大会の開催にあたりご尽力いただきました、広島県ハンドボール協会、呉ハンドボール協会をはじめ関係者各位の皆様、そして地元の呉高専の皆様に感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

徳山高専主将　山本　昇

今回の全国大会は、昨年の優勝校ということもあり非常に大きなプレッシャーの中での戦いとなりましたが、何とか目標の二連覇を達成することができました。今まで指導してくださった先生方、チームメイト、そして全国の素晴らしいライバルたちに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

今年のチームは非常に明るく、仲の良いチームでした。そして何よりもハンドボールが大好きなチームでした。集中力の弱さや昨年優勝したことによる油断と慢心が出ることもたくさんありましたが、それでも優勝という結果を勝ち取れたのは、常にハンドボールを楽しむ気持ちを持ち続けたからだと思います。

全国の舞台では、全国大会にふさわしい素晴らしいチームにたくさん出会えました。予選で戦った石川高専、熊本高専はどちらも「必ず勝つ」という強い気持ちを持っていました。決勝で戦った大阪府大高専は常に笑顔でハンドボールを楽しんでいて、戦っている僕たちも本当に楽しい試合になりました。そして、中国大会から全国大会まで３度も対戦した米子高専は、まさに最高のライバルであり、同じ中国地区代表として最高の仲間でした。

来年以降もこの大会が素晴らしいチームとの出会いの場であり続けること、そして徳山高専がその素晴らしいチームの一員であり続けることを願っています。

戦評

■準決勝

大阪府大高専　25（8－11，17－11）22　函館高専

立ち上がりは大阪府大高専が固さからかミスが目立ち、開始４分で４対０と函館高専ペースで試合が進む。その後、函館がやや決め手を欠く中で、大阪府大はミスに乗じて５連続得点し、17 分には２点差まで迫る。函館はタイムアウトを取って落ち着きを取り戻し、11 対８で前半を折り返した。

後半開始から５分間は点の取り合いになる。後半 11 分、函館３点リードのところで大阪府大７番が二分間退場となり函館が突き放すかに見えたが、逆に点差を縮められてしまう。さらに大阪府大の勢いは続き、同点となったところで函館２回目のタイムアウトを取るも流れは変えられず、後半 20 分にはついに逆転し、この試合で初めて大阪府大がリードする。粘る函館に対し、最後は大阪府大が堅い守りからの速攻で３連続得点し、決勝進出を決めた。

徳山高専　19（10－9，9－9）18　米子高専

立ちあがり米子は動きが硬く、徳山の２番池岡のミドルや 14 番濱崎のサイドシュートなどで、４連続得点を許すも、７番山根のサイドシュートや６番武良のカットインなどで、粘り強く追いかける。徳山は、15 分過ぎに７番山本のカットからの得点などで引き離そうとするが、米子のキーパー山本の再三にわたる好守などがあり、なかなか点差がつかず、徳山が１点差で前半を終了。

後半も、８分間は徳山のペースで進んでいたが、８分過ぎから米子の猛反撃が始まり、後半 19 分には逆転に成功した。３分を残して３点をリードしており、このまま米子が勝利するかに思えたが、22 分、４番野口の退場により一気に形勢が逆転し、最後は１点差で徳山が勝利した。徳山は二連覇をねらう。

■決勝

徳山高専　29（13－7，16－9）16　大阪府大高専

前半両チームとも固さが目立つ立ち上がりとなり、７分徳山高専が先取点を上げる。その後も両チームともなかなか攻守のリズムがつかめないまま時間が経過する。前半中盤より徳山高専が徐々に落ち着きを取り戻し、着実に得点を重ね、前半を 13 対７で徳山高専の６点リードで折り返す。

後半、徳山高専は前半とは打って変わり、立ち上がりから攻守によく足が動き、試合の主導権を握り、優位に試合を進める。一方、大阪府大高専は後半も動きに固さが見られ、必死に追い上げを試みるも要所でミスが目立った試合であった。

徳山高専が終始相手チームを圧倒し、快勝した試合であった。

第14回 全日本ビーチハンドボール選手権大会

大会期間：2012年8月25日（土）～26日（日）

最終順位

【男子】	【女子】
優　勝：HC大阪（大阪）	優　勝：日本体育大学（東京）
準優勝：東海Weed's（愛知）	準優勝：夙川学院（兵庫）
3　位：ボンチフェローズ（大阪）	3　位：東海Weed's（愛知）

第14回全日本ビーチハンドボール選手権大会を振り返って

（財）日本ハンドボール協会
ビーチハンドボール委員会委員長　大原 康昇

去る、8月25日(土)・26日(日)に兵庫県・神戸市アジュール舞子で第14回全日本ビーチハンドボール選手権大会が開催されました。関西地区の発展の拠点としてここ数年神戸で大会を開催していますが、今年は各地区の国体ブロック予選と重なり、参加チームが例年より少ない中での大会開催ではありました。また、例年通り大会に先立ち24日(金)に初心者技術講習会を仲田、大原で行い、大会に参加して

男子優勝：ＨＣ大阪（大阪）

HC大阪（監督兼選手）　大野 順也

はじめに、第14回全日本ビーチハンドボール選手権大会の開催にあたり、猛暑の中、スムーズな運営をして頂いた日本ハンドボール協会ビーチハンドボール委員会及び兵庫県ハンドボール協会の関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。

HC大阪（桃山学院高校・大学OB主体）は、ボンチフェローズのBチーム（ベテランチーム）として、インドアでは今年から大阪社会人3部リーグに参戦し、1部昇格を目指して活動しています。「ビーチハンドボールを楽しむ」・「若手とベテランの融合」・「打倒Aチーム」の3つをモットーとしています。

今大会が国体予選の日程と重なり、昨年のメンバー数名の出場が難しい状況の中、代わりに、昨年出場したSOCIO大阪の2名と、FSTの1名に参加を仰ぎ、なんとか選抜チームで出場することができました。

予選リーグでは、西村隆輝のシュートが炸裂し、ショットアウトでは相川がスピンシュートを決めて古巣FSTに接戦で勝利しリーグを一位で通過。準決勝は、澤田や小郷の活躍、GK元村のベテランならではの駆け引きもあり、前回王者ボンチフェローズにも接戦で勝利。決勝は、兄弟チームと古巣が負けた相手と言うこともあり、全てを背負って戦い、OFでは金南均と小林の絶妙なコンビプレーなどでショットアウトに持ち込み、最後はDFリーダー近藤が、気合でスピンシュートを決めて1点差で勝利。3回目の出場で初タイトル獲得となりました。これもひとえに、野田コーチ、ご家族の方々、また練習場所を提供して頂いている桃山学院高校の高橋精一先生、井上先生のご協力のおかげです。改めてお礼申し上げます。



今大会において、対戦した全てのチームがフェアプレーで、何よりも楽しんでいる雰囲気であったのは、ビーチハンドボール独特のルールをジャッジ頂いた、審判の方々のお蔭でもあると思います。今後、大阪からもビーチハンドを広めていければと思いますし、来年の記念大会には、より多くのチームが参加し、さらに活気ある大会となることを願っております。今大会の為にご尽力頂きました関係者の皆様、本当に有難うございました。

頂きました。大会結果は下記の通りですが、今年の特別な猛暑の中、各チームの選手諸君は熱き戦いを展開してくれました。

男子の部、初優勝のHC大阪、女子の部2連覇の日本体育大学に心から賛辞を送ると共に、今回、初参加ながらも、あぶらおおめ等のベテランチームを破り快進撃を続け2位となった夙川学院高校にも賛辞をお送りいたします。

また、国内の普及についても以前の千葉県、青森県での大会のみならず、昨年度より、愛知県、宮崎県、沖縄県で大会が開催されています。7人制とのスケジュール調整が難しい点もありますが、是非、大会に参加していただきたいと願う次第です。国内のビーチスポーツ施設はまだまだ整備されていませんが、各都道府県の協会役員の皆様方のご協力とご理解を得てビーチハンドを発展させ、ハンドボールの愛好者を増やせればと願っております。

最後に、大会開催にあたり、ご指導、ご協力いただいた日本協会を始め、兵庫県、神戸市の各団体、大会を応援していただいた神戸新聞、アシックス、モルテン等の各企業に心からお礼を申し上げます。また、猛暑の中、素晴らしいプレーを見せてくれた選手諸君、大会を陰から盛り上げていただいた大会役員関係の皆様、本当にありがとうございました。

来年も15回記念大会として、この時期に神戸で開催する予定です。多くのチームの参加を期待しています。

女子優勝：日本体育大学（東京）

日本体育大学　勝木 麻優子

はじめに、第14回全日本ビーチハンドボール選手権大会の開催にあたり、多大なるご支援、ご協力を戴きました兵庫県ハンドボール協会、日本ハンドボール協会、ビーチハンドボール委員会の方々をはじめ、関係者の方々に心より感謝申し上げます。

日本体育大学は近年、ビーチハンドボールの普及発展、研究、競技力向上の観点からビーチの大会に参加させて戴いております。今大会、日体大はアジアビーチゲームス経験者2名以外全員ビーチハンドボールの経験が浅く、初めて合わせるメンバーでの参加であった為、最初はとても不安な気持ちがありましたが、一人ひとりの「もう一度優勝カップを持ち帰る」という強い気持ちがチームを一つにし、そしてそのことが優勝へと繋がったと思います。

個人的に、私はビーチハンドボールの大会に参加するのは今大会で2回目であり、前回は猛暑と砂地に慣れる事が出来ないまま、ショットアウトで敗北するといった悔いの残る試合で終わってしまいました。今大会に参加することが決まり、試合を重ねていくうちに、前回の反省を思い出し、2セット目が勝負だと感じました。1セット目を取ることができたとしても、2セット目を落とした場合、ショットアウトでの決着となってしまいます。ショットアウトとなると、2点シュートであるピルエットシュートを打てる選手が多いチームが有利となる為、経験者の少ない私たちにとってショットアウトは避けたいものでした。しかし準決勝の2セット目にディフェンスの判断ミスやシュートミスが目立ち、ショットアウトでの決着となってしまいました。最終的に優勝することは出来ましたが、いくつかの課題が見つかり、試合の流れの中で相手の特徴を素早く掴み、パターン化せずに自分たちのプレーに変化を付けることが重要だと感じました。

今大会に参加して、普段行っている7人制のハンドボールだけではなく、少し目線を変えて違った環境とルールの中でハンドボールを行うことで、普段にはない新たな発見や、自分に足りない技術等を見つけることができました。これらを、今後の7人制ハンドボールやビーチハンドボールの練習に活かしていきたいと思います。

今大会参加チームの試合の様子や、全員で喜び合っている姿を見て、改めてスポーツの素晴らしさを感じました。通常の7人制のハンドボールでは味わうことの出来ない、ビーチハンドボールならではの楽しさや面白さを更に多くの人に知ってもらい、ビーチハンドボールが益々発展していくことを心より願っています。様々な形で支えて戴いた皆様、ありがとうございました。



2020年：オリンピック・パラリンピックを東京で実現させよう!!

2020年のオリンピック・パラリンピックの開催地は、来年9月7日開催のIOC総会にて決定します。

その間には、2月頃に前回課題となった国民支持率の再調査、及び3、4月のIOC評価委員会による立候補都市訪問・調査が実施の予定です。東京都民だけではなく、国民全体での盛上げが必須の状況です。日本ハンドボール協会は元より、各都道府県協会関係者も、地域での支援や誘致の雰囲気醸成が求められます。最大の課題は、IOCによる支持率再調査であり、この結果が誘致決定への最大のポイントになりそうです。IOCが今年の5月に発表した支持率調査の結果では、東京の支持率は47%であり、マドリードの78%、イスタンブールの73%に、大きく差を開けられており、IOCから改善の要請もあります。

先の8月20日には、ロンドンオリンピック日本代表選手団のパレードが東京・銀座で行なわれました。金メダリスト7人を含む総勢71人のメダリストが参加し、沿道に詰めかけたおよそ50万人の大観衆の声援に笑顔で応え、オリンピック期間中多くの声援をいただいた方々に感謝の気持ちを伝えました。

これからは東日本大震災被災地の皆様の理解も得ながら、ハンドボール関係者に留まらず、全ての方々の支持により、2020年東京オリンピック・パラリンピックが是非とも実現するよう、行動していきましょう。私たちのために…子供たちのために…

■オリンピック・パラリンピックとは

●オリンピックとは

オリンピックは4年に一度開催される世界的なスポーツの祭典です。スポーツを通した人間育成と世界平和を究極の目的とし、夏季大会と冬季大会を行っています。

2012年8月には、記念すべき第30回ロンドンオリンピック競技大会が、204の国と地域から約11,000人が参加し、実質19日間（開会式に先立ち男女サッカーの一部試合が行われた2日間を含む）に26競技302種目で開催されました。日本は金7個、銀14個、銅17個の計38個と、史上最大数のメダルを獲得しました。

●パラリンピックとは

パラリンピックは障害者を対象とした、もう一つのオリンピックです。4年に一度、オリンピック競技大会の終了直後に同じ場所で開催されます。第14回ロンドンパラリンピック競技大会は、2012年8月29日から9月9日まで、イギリスの首都ロンドンで開催されました。大会スローガンは「一つになろう（Live as one）」。シドニーパラリンピック以来、3大会ぶりに知的障害者が出場する競技が復活し、20競技503種目に初参加の北朝鮮などを含む史上最多の164の国と地域から約4,280人の選手が参加しました。日本は金5個、銀5個、銅6個の計16個のメダルを獲得しました。

2000年にシドニーで開催された第11回パラリンピック競技大会で、国際オリンピック委員会（IOC）と国際パラリンピック委員会（IPC）が「オリンピック開催国は、オリンピック終了後にパラリンピックを開催する」などの基本事項に合意し、双方の協力関係を深めました。パラリンピックは、「もうひとつのオリンピック」として、大いなる発展を続けています。

■日本で開催された夏季オリンピック …1964年の東京オリンピック

1964年に行われた東京オリンピック（第18回オリンピック競技大会）は、10月10日、国立競技場で行われた開会式で幕を開けました。20競技163種目に、93の国と地域から5133人が参加して熱戦を繰り広げ、アジア初のオリンピックは成功裡に終わりました。オリンピックに合わせて、東京には首都高速道路や東海道新幹線が開通しました。戦後の都市機能が飛躍的に発展するとともに、日本は高度経済成長の足がかりをつかみ、世界に向けて戦後復興をアピールすることができました。

東京オリンピックでは、日本人選手の活躍は目ざましく、金メダル16個、銀メダル5個、銅メダル8個、合計29個のメダルを獲得しました。取分け、"東洋の魔女"と呼ばれた女子バレーボールチームは決勝で強豪ソビエト連邦と対戦し、ストレート勝ちで金メダルを獲得し多くの国民を熱狂させました。

東京オリンピックは都市の発展や経済成長のみならず、日本のスポーツを普及・発展させた功績は多大であると言われています。

■オリンピックの歴史とハンドボール競技の採用

男子競技が夏季オリンピックに正式種目に採用されたのは1936年のベルリンオリンピックからで、アドルフ・ヒトラーの特別要求によって実現しました。その後は、一時期、正式種目から外されますが、1972年のミュンヘンオリンピックから復活し、現在に至っています。

一方、女子競技については、1976年のモントリオールオリンピックから正式種目になり、現在に至っています。

■日本のハンドボールとオリンピックへの出場

日本がオリンピックに出場したのは、男子が1972年ミュンヘンオリンピック、女子が1976年モントリオールオリンピックが最初です。以降、男子は、1976年、1984年、1988年の合計4回、女子はその後一度も出場できていません。

■オリンピック歴代日本代表選手と成績

オリンピック出場メンバー						
1972 年	ミュンヘン・オリンピック男子			11 位／ 16 チーム		
	監督	竹野　奉昭				
	コーチ兼 FP	近森　克彦				
	GK	本田　洋	下里　敏彦			
	FP	木野　実	飯田　誠行	野田　清	有永　修二	佐々木　健一
		氷海　正行	新実　俊夫	中井　武三	早川　清孝	
	日本協会役員	村田　弘				
1976 年	モントリオール・オリンピック男子			9 位／ 12 チーム		
	監督	竹野　奉昭				
	コーチ	東　嘉伸				
	GK	本田　洋	柴田　正章			
	FP	木野　実	中井　武三	蒲生　晴明	藤中　憲二	松原　光三
		花輪　博	穂積　豊彦	佐藤　要二	佐々木　健一	菊池　悟
1976 年	モントリオール・オリンピック女子			5 位／ 6 チーム		
	監督	井　薫				
	コーチ	鈴木　義男				
	GK	和田　祥子	久保　徳子			
	FP	島田　夏枝	蔵田　照美	山下　恵美子	紀野　奈々美	松下　仁美
		河田　栄子	加藤　美起子	穂積　美保子	古佐原ひろ子	小森　久里子
1980 年	モスクワ・オリンピック男子			不参加		
	監督	竹野　奉昭				
	コーチ	東　嘉伸				
	GK	福井　秀人	井藤　英忠	大畑　孝広		
	FP	津川　昭	穂積　豊彦	大原　真造	斉藤　将一郎	斉藤　幸司
		山本　伸二	中本　満明	蒲生　晴明	池ノ上　孝司	関　健三
		志賀　良弘				
	※日本は出場権を獲得したものの本大会は不参加					
1984 年	ロサンゼルス・オリンピック男子			10 位／ 12 チーム		
	監督	市原　則之				
	コーチ	野田　清				
	GK	井藤　英忠	大畑　孝広	上村　幸彦		
	FP	蒲生　晴明	山本　伸二	池ノ上　孝司	生駒　靖夫	松井　幸嗣
		中本　満明	西山　清	佐々木　信男	関　健三	志賀　良弘
		田口　勝利	高村　誠一			
	日本協会役員	一宮　昌平	洞ケ瀬　直幸			
1988 年	ソウル・オリンピック男子			11 位／ 12 チーム		
	監督	野田　清				
	コーチ	津川　昭				
	GK	井藤　英忠	矢内　浩	橋本　行弘		
	FP	西山　清	山本　興道	玉村　健次	荷川取　義浩	首藤　信一
		高村　誠一	立木　浩二	田口　隆	宮下　和広	奥田　新治
		藤井　泉	山村　敏之			
	日本協会役員	佐藤　要二	塙　敏			

■オリンピック優勝国とアジア代表の成績

	男子優勝国とアジア代表戦績		女子優勝国とアジア代表戦績	
2012 年：ロンドン	フランス	韓国（11）	ノルウェー	韓国（4）
2008 年：北京	フランス	韓国（8）	ノルウェー	韓国（3）中国（6）
2004 年：アテネ	クロアチア	韓国（8）	デンマーク	韓国（2）中国（8）
2000 年：シドニー	ロシア	韓国（9）	デンマーク	韓国（4）
1996 年：アトランタ	クロアチア	クウェート（12）	デンマーク	韓国（2）中国（5）
1992 年：バルセロナ	EUN	韓国（6）	韓国	
1988 年：ソウル	ソビエト連邦	韓国（2）日本（11）	韓国	中国（6）
1984 年：ロサンゼルス	ユーゴスラビア	日本（10）韓国（11）	ユーゴスラビア	韓国（2）中国（3）
1980 年：モスクワ	東ドイツ	クウェート（12）	ソビエト連邦	―
1976 年：モントリオール	ソビエト連邦	日本（9）	ソビエト連邦	日本（5）
1972 年：ミュンヘン	ユーゴスラビア	日本（11）		



■ 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会計画

●オリンピック競技大会開催概要

- 正式名称：第 32 回オリンピック競技大会
  英文名称：The Games of the XXXII Olympiad
- 開催期間 2020 年 7 月 24 日(金)～ 8 月 9 日(日)
  競技数：28 競技
- ハンドボール会場は、国立代々木競技場を予定

●パラリンピック競技大会開催概要

- 正式名称：第 16 回パラリンピック競技大会
  英文名称：Tokyo 2020 Paralympic Games
- 開催期間 2020 年 8 月 25 日(火)～ 9 月 6 日(日)
  競技数：22 競技

■ 2020 年東京オリンピック・パラリンピック：招致スケジュール

2012 年 5 月：立候補都市選出のための IOC 理事会
→東京、マドリード、イスタンブールを選定
2013 年 1 月上旬：各都市、立候補ファイル提出
2013 年 2 月頃：IOC による国民支持率調査（予定）
2013 年 3 月～ 4 月：IOC 評価委員会による立候補都市訪問・調査
2013 年 9 月 7 日：IOC 総会（ブエノスアイレス）にて開催都市決定

(参考資料)
ミュンヘン総括…機関誌 103 号、30 ページ
http://www.handball.jp/kikanshi/103-1972-11.pdf


2012 ロンドンオリンピック

第4回 日韓小学生ハンドボール親善交流会（派遣）

日程：2012年8月20日（月）～24日（金）
場所：韓国・済州道 西帰浦市 孝敦体育館

■8月21日（火）
【男子】韓国（チェジュ選抜） 16（9－1，7－10）11 東海ハンドボールスクール
【女子】韓国（仁川九月初等学校） 11（11－0，0－8）8 東海ハンドボールスクール
【男子】韓国（釜山聖知初等学校） 14（7－4，7－6）10 東海ハンドボールスクール
■8月23日（木）
【女子】韓国（仁川九月初等学校） 12（7－5，5－5）10 東海ハンドボールスクール
【男子】韓国（釜山聖知初等学校） 28（14－9，14－7）16 東海ハンドボールスクール



東海ハンドボールスクール 濱野 健一

今回、8月20～24日に大韓民国済州道西帰浦市（チェジュ道ソギポ市）において、第4回日韓小学生ハンドボール親善交流会が開催されました。韓国選手団は5月に韓国の全国大会を制した、男子は釜山聖知初等学校、女子は仁川九月初等学校のチーム。そして、男子は地元の済州島の選抜チームが日本選手団を迎えてくれました。

交流においては、訪韓した翌日の交流戦で韓国の選手を見て、その大きさに驚きました。昨年も殆どの選手が160㎝クラスで驚きましたが、今年の男子チームのエースは180㎝。さらに、ポストに170㎝が2人のダブルポスト攻撃。女子は160㎝程の選手が揃い、GKは175㎝。見るからに鍛えられた足も印象的でした。そんな選手に対する東海ハンドボールスクールの選手達は、体格では全く歯が立たない状態。合同トレーニングでも、パス、シュート、ステップワークの差が感じられました。昨年も同様に感じましたが、選手達はスタートから仲良く会話でき、ジェスチャーを使って仲良くなっておりました。この歳頃から国際交流をする意義でもあると強く感じました。スタッフについても、初日から堅苦しい雰囲気はなく、交流できる事を楽しんでおりました。

21、23日の2日間は、午前中は合同トレーニング、午後からは交流試合を行うスケジュールで進みました。トレーニングは男女別で、フットワーク、ポジショントレーニング、ポストプレーを韓国メニューで合同トレーニングをしました。交流試合においては、男女とも韓国チームのスピードとテクニックが上回り、韓国チームの全勝と言う結果となりました。しかし、男子においては体格差を克服できるDFが随所に光り、昨年より健闘できた結果となりました。韓国代表・男子はこれまでと違い4－2DF、男子・済州選抜と代表・女子は6－0DFでした。交流試合、合同トレーニングにおいて、基礎技術をこの時期に育成することの必要性と、統一された選手育成スタイルを感じました。また、ポストを意識する練習が多く、徹底された内容であった事が新たな発見でもありました。

今回の親善交流会を総括して、昨年の受入れと今回の遠征を通じ、子供達のコミュニケーション能力は素晴らしいものがあり、スタッフにおいても昨年ほどの壁はなく、良い関係が築けたと感じました。

最後に今回このような貴重な体験をさせて頂いた、日本協会の皆様ならびに、本交流会にご尽力を賜りました皆様へ感謝しております。今後もこのような貴重な経験をした子供達が、未来のナショナル選手へ育ってくれる事を期待しております。





東海ハンドボールスクール男子主将　衣川 敦人

まず初めに、今回の日韓親善交流会の開催に協力して下さった日本協会や韓国協会をはじめ、関係者の方々に感謝したいと思います。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

韓国へ行って一番驚いた事は、韓国チームの体が大きい事でした。エースの選手は身長が約 180 ㎝、他にも 170 ㎝のダブルポストがいて、僕達とは比べ物にならない大きさでした。日本でこれほど大きな選手を相手にした事が無かったので、貴重な経験でした。

韓国の優勝チームとの交流戦の時、一番通用した事は高いディフェンスからの速攻でした。180 ㎝のエース、他の選手もしっかり止めて、速攻へ展開し得点できました。試合後に、日本協会の角先生に褒めて頂き、嬉しかったです。試合を通しての課題は、セットプレーでした。スピード不足で通用しませんでした。この後、スピードアップしてセットプレーでの得点を増やしたいと思います。

今回の日韓親善交流会を通して、自分達の通用する事や足りない部分が分かりました。また、韓国の選手達との絆が深められて良かったです。合同練習で韓国のコーチに教えてもらった事や、交流戦を通じて感じた事を、今後のハンドボールに活かしていきたいです。

東海ハンドボールスクール女子主将　佐藤 那有

私達は 8 月 20 日～ 24 日、韓国へ行ってきました。

韓国では、練習と交流試合を中心に有意義な 5 日間を過ごしました。練習では、フットワークやフェイント、パスとシュートをしました。フットワークやフェイントは、いつも日本でトレーニングしている内容と違い、また回数も多くとても大変でした。

試合では、まず韓国選手の声の大きさにびっくりしました。そして、韓国選手が練習でやったフットワークやフェイントを使いシュートをどんどん狙ってきました。私達はそのスピードについて行けず、たくさん点を取られてしまいました。私達も、韓国のコーチに教えてもらったトレーニングを活かして、一本でも多く守れるように、そして一点でも多く得点できるように頑張って行きたいと思います。

練習や試合では上手くコミュニケーションが取れませんでしたが、ホテルへ戻ってからプレゼント交換をきっかけに楽しくお話ができるようになりました。韓国の選手と仲良くなれてとても嬉しかったです。

最後になりますが、この遠征をサポートして下さった方々にお礼を言いたいと思います。

ありがとうございました。

〜欠かせない自己研さん〜

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw フリースロー

早いもので間もなく2012年が過ぎ去っていく。ロンドンオリンピックイヤーだったが、ハンドボール球界には、その興奮を共有することができなかったのは、誠に残念でした。球界には次回のリオをにらんだ早急な対策が待ち構えています。次こそ日本国内、いや世界の多くのファンとともにハンドボールの素晴らしさに酔いたいものです。

さて、最近スポーツ界でよく言われるのが「考えるプレー」ではないでしょうか。確かに球技ではプレーが始まったらベンチからの声、言い替えれば指示は届きにくい面があります。そこで選手個人が考えてのプレーが大事だと言うわけです。

「チーム力」に加え「個の力」を上げて戦うことが勝利への条件の一つと考えられているわけです。

でも、それぞれの競技にいくら精通していたとしても、個々の能力には差や限界があるのも否定はできません。それがトップアスリートになりうる条件かもしれません。でも、そこに際限なく近づくことは可能ではないでしょうか。

もう随分前になりますが、こんな話を聞いたことがあります。サッカーJリーグが誕生して、国内がサッカーブームで沸いていたころです。あるJクラブのスタッフの言葉は、今でも忘れることはできません。

「選手がサポーターから注目されるのは、本人はもちろんクラブとしてもうれしいこと。でも、ある選手が代表に選ばれて合宿に参加した時のことです。聞いた時に“本当かよ”とひっくり返りましたよ。新幹線に一人で乗るのは不安と言ったのです。社会人ですよ。それがなんてことを…。耳を疑うより冗談でも言っているのだろうと思いました。だが、本当だったのです」

笑い話ではありません。真実なのです。乗車券と一緒に、ホームでの乗る位置、号車番号、乗り換えの詳細な説明などをメモ書きして渡し、どうにか目的地に着いたということです。

それまで指導者やマネジャーらから言われるまま。一人で行動したことがないため、無理もないかもしれません。でも、これでは「考えてプレーしろ」と言われてもできるわけはありません。要は日ごろから、いかに自分を高める努力につとめるかを肝に銘じておくことが大切だということではないでしょうか。このことは現役を退いた時、生活設計するためにも欠かせないことです。

いいプレーをするために、チームの勝利のためには、自己を磨き続けることは当然のことです。この選手は結局、頂点に登りつめることはできませんでした。極端な例でしょうが、トップアスリートに自己研さんは絶対条件だと私自身にもいい教訓になりました。

ＮＴＳブロックトレーニング報告【関東】





開催日時	2012年9月1日（土）～2日（日）		
場　　所	埼玉県 「彩の国くまがやドーム」		
参 加 者	NTSスタッフ		14名
（総数）	補助指導者		66名
	選手	小学生	48名
		中学生	55名
		高校生	48名

NTSブロックトレーニングも13回目を数え、開催担当も2巡目になり、各都県協会のご理解と献身的な協力体制のもと運営・指導面ともにスムーズに展開されています。開催地については関東8都県の担当持ち回りで実施。年々、選手・引率指導者についても参加意識が高揚し、個人のスキルと全体のレベルもアップした感がある。実技指導においてもトレーニングの意図が明確で、ポイントを分かり易く説明実践されており、引率指導者からも大変好評であった。

今後の課題としては、「指導者の為の講義やディスカッションの時間の確保」という要望に、解決の方法を示さなければと考える。

また、NTSへの参加選手の輩出チームが県によっては特定化される傾向にあり、NTSの方針なり運営方法が、一部の関係者のみに限られ、それ以外の者に十分に理解されていないのが現状である。さらには各県において伝達講習会等を確実に実施していただき、NTSの情報が全チーム、関係者に速やかに浸透することを願う。

今日のNTSブロックスタッフ陣が揃うまでには、約10年の歳月を費やした。各都県の事情を察し、情報の共有化や役割の分担分業等を考慮し、各カテゴリーのインストラクターの発掘にも時間を要した。

例年、開催の時期等については施設の確保を最優先に、国体のブロック大会や各連盟の大会時期、更には学校行事等を考慮して計画実施してきたのが現状である。

ブロックトレーニング終了後のアンケートの内容を拝見すると、将来のナショナル選手としての心構えやスポーツ選手に必要な栄養学や食育、発育発達段階に応じたメンタルトレーニングやクリニック等を付加して行くことが望まれている。「世界で戦うための『強い心と技』の育成」のためにも早期から取り組んで行く必要があると認識いたします。



今後を見通したインストラクターの育成についても、早急に進めていくことが不可欠であると考えます。

（運営委員長　大村　久）

ＮＴＳブロックトレーニング報告【近畿】

実施期間	1	2012年8月18日～8月18日
開催場所		夙川学院大学
実施期間	2	2012年8月23日～8月23日
開催場所		神戸中央体育館
実施期間	3	2012年8月24日～8月24日
開催場所		神戸国際大学

参加者	スタッフ	22名	デモンストレーター		補助指導者	29名
	高校生	33名	中学生	39名	小学生	35名
					合計	158名

NTS兵庫開催を終えて

兵庫県ハンドボール協会理事長　中村 正治

平成23・24年の２年間、本県で「NTS」を開催させていただきましたが､国体近畿ブロック予選の変更等で日程･場所（体育館）の決定が遅くなり、みなさまに大変ご迷惑をおかけしたことを心からお詫び申し上げます。また、「平成23年度 小学生の部」につきましては、京都府ハンドボール協会様に会場のご提供いただいたことを心からお礼申し上げます。さて、私自身も「NTS」の開催当初から、強化委員として参加させていただいておりますが、当時に比べ、インストラクター・役員等も充実してきたと思います。

次年度からは、役員・補助役員の負担を軽減できるよう、微力ながら協力させていただきたいと思います。

NTSトレーニングに参加して

神戸国際大学附属高等学校２年　佐々木 亮大

私はNTSブロックトレーニングに参加して感じたことは、日本代表の選手は本当にすべてにおいてすごいなと改めて感じました。そして本当にこの練習に参加できて良かったと思いました。なぜなら他のチームの選手と練習ができて、日頃学べないことや感じられないことが感じられたからです。他のチームの選手とプレーするといつもの練習ならパスが来るところでこなかったり、なかなかプレーが合わなかったので、他のチームの選手と合わす事はとても難しいことだと思いました。このような体験をして日本代表の選手は他のチームから集まっているのに素晴らしいプレーをするので憧れました。このことを通して日本代表の選手に近づくために、日頃の練習からしっかり声を出して周りの選手とコミニュケーションをはかり、指示できれば少しは日本代表選手に近づけるかなと思いました。貴重な体験をさせていただいてありがとうございました。

NTSトレーニングに参加して

魚住中学校　井上 響季

私はNTSに参加させていただき、自分の学校のチームとは少し違う緊張感や競争心を味わうことができました。また、技術力の高い選手達との練習から、ハンドボールの楽しさを知ることもできました。今まで経験したことのない練習や、他府県の人たちとチームを組んで試合をしたり、たくさんの先生方からの指導やアドバイスを受けたりと、とても有意義な時間を過ごすことができました。

NTSに参加し、基本的なパス・キャッチ・フットワークの大切さと、それらの技術が自分自身にはまだまだ足りないことを改めて感じました。JOCでは、それらの課題を一つずつ克服し、チームに貢献できるように、これからも目標を持って、しっかり練習に取り組んでいきたいと思います。





NTS近畿ブロック　強化練習に参加して

明石ジュニア６年生　梶山 瑞生

始めに、NTSの練習に参加できると聞いたときは、とてもうれしかったです。

当日は、ウォーミングアップから始まり、午前は基礎を多く習いました。フットワークは､自分のチームの練習と少し違い、勉強になりました。ぼくは、フローターなのであまり倒れこみシュートをしないし、試合中シュートをするときに、ディフェンスに押されて、よく倒れるので、ローリングやスライディングの練習ができてよかったです。

パスは、ラテラルや逆スピンなど、自分のチームであまりしない投げ方を教えてもらいました。

速攻は、味方がシュートを打ったらすぐ帰る練習でした。慣れていないので、最初は打つのを見てしまい、すぐ帰れませんでした。試合では、シュートをはずすと逆速攻をされることがあるので、早く帰る練習は大事だと思いました。

ディフェンスは、一人が連続でポスト、フローター、シュートカット、パスカットする練習でした。おもしろかったです。

午後は、鬼ごっことシュート練習をしてから、混成チームでゲームをしました。最初はフローターをしましたが、みんな上手でいつものように点を決めることができませんでした。途中からサイドもやってみました。他の府や県から来ている人で、同じ左利きでも、自分より背が高くてパワーのある人がいました。これからは、もっとジャンプ力やスピードをつけて、うまくなるように練習をがんばりたいです。そして一緒に練習した人のチームとまた試合がしたいです。

NTSブロックトレーニング報告【四国】

四国では、2012年度NTS四国ブロックトレーニングを次のように開催いたしました。

1　場　所：愛媛県総合運動公園体育館
2　日　時：平成24年9月8日（土）～9日（日）
3　参加者：総数　153人
　　小学生 男子 21人・女子 13人
　　中学生 男子 16人・女子 16人
　　高校生 男子 16人・女子 16人
　　引率指導者 26人・インストラクター 8人
　　NTS委員 4人・運営委員 2人
　　デモンストレータ 15人

2011年度より「NTS四国ブロックトレーニング」（実施要項）を作成し、組織化を図るとともに、NTS委員の各役割を明確化し、ブロックから各県へNTSの組織や意義、一貫指導内容の伝達と一貫指導体制の構築ができるように努力しています。

これまでも、小・中・高の各カテゴリーを同じ日程で開催してきました。今年度から、中学生が1泊2日間のトレーニングを行うこともあり、同じ会場でコート3面を使用してのトレーニングを行いました。四県のため、各県3名枠の選手では、ゲームなど集団でのトレーニングを実施するには支障をきたすので、参加人数を各県4名として実施しました。

今後の課題としては、次の三つが挙げられます。①小・中・高の一貫指導体制となると、少し疑問や課題があるのが現状です。②今年度は、インストラクターを増員させて充実した指導体制となりました。インストラクターが各県の技術指導員を兼ねており、各県においても充実した指導ができるものと期待しています。しかし、個々の負担と指導者の育成には、課題が残されています。③中学生のカテゴリーでは、開催日時が、JOCブロック予選と同じ月となり、日程が課題となりました。

最後になりましたが、今年度は、日本協会普及本部長である角紘昭常務理事に開会式より出席していただき、あいさつやトレーニングの指導状況を見ていただく絶好の機会を得ることができました。また、香川銀行の選手をはじめ、運営に当たった多くの関係者の皆様には、深く御礼申し上げますとともに、NTS四国ブロックトレーニングが、今後さらに、充実したものになるよう御理解と御協力をお願い申し上げます。

（文責・ブロック運営委員長　田中達男）









ヨーロッパハンドボール連盟「ユースコーチ講習」参加報告
2012 EHF Youth Coaches' Course

鹿児島大学教育学部保健体育科准教授　森口 哲史

ヨーロッパハンドボール連盟（EHF）が主催する「2012 EHF Youth Coaches Course」が2012年7月12日～15日の4日間にわたってオーストリア・Bregenzにて開催されました。以下、コースに参加した体験を著者の目線から報告します。

本講習会参加のきっかけとなったのは、2011年11月にウィーンで開催されたEHFハンドボール科学者会議に出席したことでした。欧州、北アフリカのハンドボール研究者たちが一斉に集い、熱心に研究成果を発表し、国境なく情報を交換し合う姿は強く印象に残っていました。楽しく飲食しながら「ハンドボール」という一つの共通点が起始となり、人間の繋がりがこのようにも拡がるものかと感激しました。自身のハンドボールおける、文化、戦術、トレーニングに関する情報収集法の一つが、「日本の外に出る」こととなり、本コーチ講習出席への強い動機となったわけです。

EHF Youth Coaches Courseは1998年からスタートし、毎年ヨーロッパ各都市で開催されるユース大会に併せて開かれています。今年は、U18 European Championship（MEN18 EURO 2012）オーストリア大会に併せて開催されることになっていました。U18世代のヨーロッパ最高峰の戦いが観戦できることもこのコースの魅力の一つであります。コースへのエントリー登録は2012年4月後半に締め切られ、5月にEHFからの参加許可が届きました。出国までの間に適宜EHF担当者からメール連絡が届いたので（質問にも丁寧に対応してくれます）、異国での滞在を前に頼もしいサポートとなりました。

講習会会場はブレゲンツというオーストリア最西の美しい湖畔の町でした。特に夏季の湖上オペラは有名で、日本でもメディアなどを通じてしばしば紹介されているようです。私は、羽田からドイツ・フランクフルト経由でスイス・チューリッヒへ入り、チューリッヒからユーロシティ鉄道に乗ってオーストリア・ブレゲンツを目指しました。

講習会参加者が宿泊するホテルで、神奈川県相模原ハンドボールクラブの南木雅弘先生と出会いました。南木先生はドイツ語がとてもお上手で欧州史、欧州文化にも非常に詳しく、失礼ながらとても心強い「ハンドボール仲間」となりました。ホテルにはぞくぞくと大男たちが集まってきて、計18カ国、49名（日本から2名）での講習会スタートとなりました。

今年は「グループセット戦術の中で、いかに個人技術を応用するか」という大テーマのもとに、4日間の講習会が設けられました。以下に簡単な全体スケジュールを示します。

■1日目　8：30～12：30（体育館）【セット攻撃理論、セット防御理論、防御連携 ウィングと45°、防御連携45°とセンター】→（移動）→14:00～22:00（スポーツホール）【MEN18 EURO 2012の観戦】

■2日目　9：00～12：30（体育館）【GK練習法①、防御連携 DFラインとGK】→（移動）→14：00～22：00（スポーツホール）【MEN18 EURO 2012の観戦】

■3日目　9：00～17：00（終日体育館）【パラレル攻防とクロス攻防、ポストプレーヤーとの連携、パスドリル・パスゲーム、GK練習法②】

■4日目　9：00～12：30（体育館）【ゲーム分析、レフェリングについて】→（移動）→14:00～22:00（スポーツホール）【MEN18 EURO 2012の観戦】

講習会1日目。まず初日の午前中に、欧州強豪国に関する形態的特徴と戦術トレンドが紹介されました。特に欧州で力のある現6チーム（ドイツ、スペイン、スウェーデン、フランス、デンマーク、スイス）について、形態的特徴（身長・体重）、攻撃特徴（きっかけ作り・連動性・ポジショニングとシューティングポジション・個人技術）、防御特徴（DFシステム・DFラインの高さと角度・マークの厳しさ・GK技術）について、多様な映像サンプルを用いながらの説明が行われました。U18世代とはいえ、トップ6チームの平均身長は190cm、平均体重は86kgと恵まれた体格です。そして、各国のフル代表までを見据えたチームづくりも工夫されています。例えば、この世代のスペインチームは60分間組織化された自陣マンツーマンDFを行うなど、この年代カテゴリーならではの戦術も紹介されました。

実技講習は、1日目午前～3日目午後まで実施され、講師はMarczinka氏（HUN）とFilz氏(AUT)が努め、選手役はオーストリア代表ユースチームが協力してくれました。全体的な印象としては、必ず対人場面をつくり、連続的で、選手が足を止めている時間を少なくする工夫がなされていたと感じます。対人負荷を取入れたフットワーク、対人コンタクト練習がしっかりと設けられ、パスやシュートにも必ず何らかのストレッサー（障害物や対人など結果を歪める要素）を用意するといった具合に、ノーストレスでのプレーはほとんどみられませんでした。コーチは、「この練習の最終的な形と意義」をしっかりと把握した上で、分習的な動作確認から徐々に人数を増やした応用的攻防（連携、バックアップの徹底）へ発展させていました。その中でも、足を止めてただ見ている選手が減るような「場作り」と「その他の課題」をうまく準備して選手をローテートさせていた、という印象です。一方、GKトレーニングでは、テニスボールやトランプ（手裏剣のように投げる）を使用するなど、空中浮遊時間が異なるものを混在させたユニークなタイミングトレーニングなども紹介されました。いずれのセクションでも、個人技術を高めるような基礎練習とその技術を応用して行う組織的（連携的）練習がセットになっており、今年の大テーマに





沿った講習会であったと思います。

講習会1日目と2日目の午後からU18 European Championship会場へと移動し、夜22時まで大会観戦を行いました。長時間であるにもかかわらず、講習会参加者は非常に熱心で、スコアーをつけるもの、動きを書き留めるもの、ビデオ撮影するもの、大声で応援するもの（特に自国チームには）、各自それぞれの活動を行っていました。熱心というより本当にハンドボールが好きなのだと思います。私は、試合前のコートW-Upにも興味があったので、各国の特徴ある「準備の仕方」を記録しました。特にパススピードの速さと動き作りのドリルなどは参考になりました。試合展開も一進一退、U18の少年から「国家のプライド」が伝わる緊迫したゲームばかりです。共に観戦した某国のコーチが「5点差以上離れるゲームはつまらない。面白いのは1点差ゲームなんだ。」と何度も繰り返していたのが象徴的で、競技者、観客、主催者、会場全体がそんなゲーム展開を作り出し、そんなゲームに興奮するような、日本とは異質の空間であったように感じました。ボールゲームがもつ「結果の未確定性の魅力」が共通理解されているという雰囲気です。なお、この大会結果の詳細についてここでは触れませんが、EHF Webサイトで確認することができます。

講習会最終日の4日目は、我々が観戦した1日目、2日目の強豪国の試合について、オーストリアハンドボール協会のアナリストがゲーム分析を行い、報告されました。身体的情報はもちろんのこと、DFシステム、攻撃の導入パターン、シュート確率、GK阻止率、各チームの個人技術分析（バック、ウィングのシュートテクニックやピボットの能力）、チームが抱えている問題点など、講習会参加者にとっては「熱が冷めないうち」の報告とあって、活発な意見交換が行われました。分析からもれていた「クロアチア、セルビア、アイスランドはどういうチームだ？」という声も上がるほど、強豪国がひしめく欧州だけあって、コーチ陣のチェックも拡がります。そして、とても気さくなKonecny（CZE）氏の、レフェリー講習会を最後にEHF Youth Coaches Courseは終了となりました。引き続き行われた閉会式では、大きな拍手の中で、EHF担当者から参加者一人一人に講習会参加証が手渡されました。私も「アジアから良く来てくれましたね」というような言葉とともに参加証をいただきました。

このコーチ講習会に参加して感じたことは、講習会内容やEURO観戦も然る事ながら、それらを裏打ちしているヨーロッパの情報発信力、情報共有力です。ヨーロッパ全体で強くなろうとせんばかりに、EHFスタッフをはじめ、ナショナルクラスコーチから地方クラブチームコーチまで、熱心にハンドボールに関する様々な情報交換を行っていました。近年の欧州ハンドボールにおいては、常に新しい選手が登場し、新しい動き、新しい連携、新しい展開が生まれ、観るものは「僅差のゲーム」を求めています。こういった競技環境とEHFの組織活動の連動が、欧州の強さを支える一要因であるのかもしれません。

このような貴重な研修の場をいただきました鹿児島大学教育学部に深く感謝いたします。

医事委員会だより

オリンピックサイクルに従い、今年度は旧体制が終わり新たにリオデジャネイロオリンピックへ向かって新体制がスタートしました。

昨年度までの医事委員会の活動は、まず各カテゴリーのナショナルチームに帯同するドクター／トレーナーの派遣です。特に、男女ナショナルチームにおいてはオリンピックサイクルの約4年間は可能な限り固定メンバーで帯同してチームとしての“和”を築く事を目的としました。この考えは、リオ五輪への新体制でも同様のスタイルで踏襲する予定です。

また、懸案でありましたトレーナー部会を今年度立ち上げる事ができました。今後は、トレーナー部会を中心に幾つかの中央競技団体（サッカー、バスケット等）で以前より行われている競技特異的な外傷／傷害のデータ集積を行い、それを基にした外傷／傷害予防に関する啓蒙運動を行う準備を進めています。これに関連して、NTSセンタートレーニングにおいて平成22年度より試験的に施行しておりましたメディカルチェックを今年度より継続して行える事となりました。この事業は、「メディカル情報および体力情報は、選手評価のための客観的データであるとともに、外傷予防を講じる際の重要な判断基準となり得る」事を前提に情報科学委員会と合同で得られた情報をデータベース化して、将来の選手育成と安全なハンドボール環境の構築を行う事を目標とします。

次に、競技力向上の一環として「食育」に焦点をあてています。昨年度同様に今年度もNTS近畿ブロックに医事委員の管理栄養士が参加して、次代の全日本選手に対しての「食育」を行いました。また「公認スポーツ栄養士」取得に関する支援を行っています。

それから、今年度は思ってもみなかった2例のドーピング規則違反の発生がありました。過去を振り返ってもハンドボール競技者では初めての発生が続けて起こったという事は、新たな防止対策を喫緊に行わなければならない事が示されました。当委員会としてはアンチ／ドーピング特別委員会と歩みを一にしてドーピング違反の撲滅に立ち向かう覚悟であります。そのためには、スポーツファーマシストの医事委員を中心にトップレベルからドーピング検査対象となります国体参加の高校生、さらには予備軍であります中学生の若年層までドーピング防止の啓蒙運動が必要です。

最後に、審判部と共同で“審判員の身体状況とパフォーマンス変動に関する研究”を昨年度より取り組み、今年度も継続して行っています（詳細は、平成24年8・9月合併号に掲載）。

以上、限られた予算内で事務局の原田悟氏（医事委員会担当）の支援を受け、リオ五輪出場へ向けて日本ハンドボールチームのバックアップを行う予定です。

医事委員会委員長　佐久間克彦

平成24年3月10日～11日、駒澤大学において第10回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。本研究会は、全国指導者が自身の経験や・知見を持ち寄り、実際の現場で有用な情報を共有する機会として位置付けられています。

ハンドボールコーチング研究会の発表につきまして、本誌で報告する運びとなりました。

今月は松木優也先生（福岡大学）の発表内容「ハンドボール競技におけるサイドシュートの決定要因」及び會田宏先生（筑波大学）「左サイドと右サイドのシュートプレーは同じではない」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で報告を連載いたします。

(財)日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人福島高等学校）

ハンドボール競技におけるサイドシュートの決定要因

―最終局面に着目して―

松木優也、中原啓伍、明石光史、丸井一誠、田中　守（福岡大学スポーツ科学部）

キーワード：最終局面、駆け引き、意識

【緒言】

ハンドボールにおけるサイドシュートは、攻撃の幅を広げるだけではなく、ゴールキーパー（以下GK）に大きなプレッシャーを与え、時にはゲームの流れを左右する重要なシュート技術の一つである。下川ら[1]はサイドシュートの運動経過を、「待ち」「受け」「跳び込み」「対峙」「シュート」「リリース」「着地」の７局面に分節化している。本研究では、GKと向かい合う最終局面である「対峙」「シュート」「リリース」の３局面に着目し、シューターがどのような意識でシュートを行なっているかという主観的情報と、ビデオ撮影による実際のシュート分析から、サイドシュートの決定要因を探る一資料を得ることを目的とした。

【研究方法】

対象：研究対象者は、F大学男子ハンドボール部に所属する１～３年生のサイドプレーヤー計７名とした。また、GKはレギュラーの２名とした。

ビデオ測定：対象者７名にサイドシュートをそれぞれ10本ずつ打ってもらい（計70試技）、ビデオカメラで撮影した。ビデオカメラはサイドシュートを打つコートの側方に１台、シューターとゴールキーパーの延長線上になるようゴール裏に１台、計２台で撮影した。測定項目は「決定本数」の他に、「リリース時のGKとの間合い」「シュートコース」「シュートの種類」「シュートタイミング」の４項目とした。

意識調査：７名の対象者に、アンケートによる意識調査を行なった。調査項目は次の通りである。また、①～⑤の設問に対する回答は、選択肢の中から複数回答可とした。

①シュート時のGKとの間合い
②対峙局面で着目しているGKの動き
③対峙局面でのGKとの駆け引きで意識していること
④得意なコース
⑤得意なシュートタイミング
⑥サイドシュートを打つ過程の中で、自分が意識的・無意識的に行なっている動作・クセ・コツについて（自由記述）

考察の観点：ビデオ測定の結果と、意識調査の結果を比較し、最終局面である「対峙」「シュート」「リリース」の３局面でシューターが意識している動作と、実際の動作にどれだけ差がみられるのかを明らかにする、更に、その差がシュートの決定要因にどれだけ影響しているのかを考察、検討していく。

【結果及び考察】

「GKとの間合い」

まずGKとの間合いについて見てみると、70本中37本が２～３ｍの間合いでシュートしており、決定率も最も高かった。明石ら[2]の研究報告では、シューターとGKの間合いで最も阻止率が低いのは２～３ｍの時であるとされており、本研究でもこれを支持する結果となった。また７名全員２～

３ｍでシュートすることを意識しており、これは決定率を高めていく上で重要な意識であることが示唆される。

「シュートコース」

アンケートでは、７名中５名が近め下、４名が遠目上が得意と回答している。実際のシュートを見てみると、最も多かったのは遠目上の 16 本であり、近め下は８本であった（図１）。また、遠目も近めも得意と回答している選手のみの結果をみても、近めのシュートは１本しかみられなかった。ビデオを見ても、GK が近めを防ぐように構えている場合が多いため、近め下が得意と意識していても、駆け引きの中で GK を遠目に動かす工夫が必要であると考えられる。

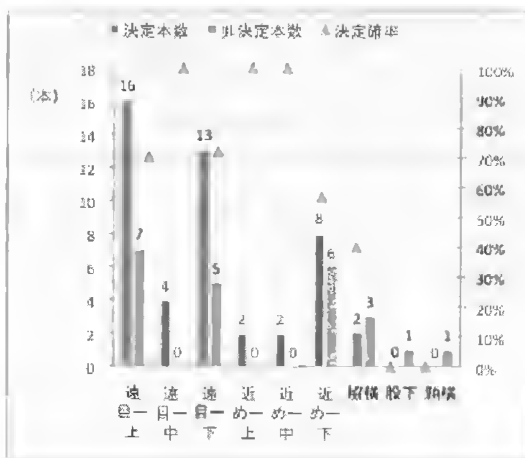


図１　全試技のシュートコースと決定率

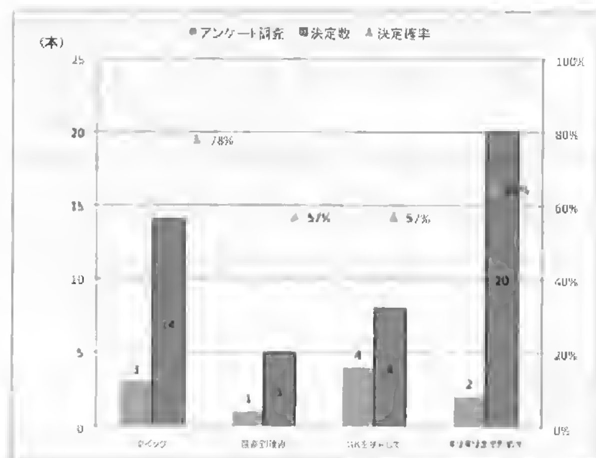


図２　シュートタイミングに関する意識調査と実際の結果

「シュートタイミング」

シュートタイミングに関する意識調査と実際のシュートの結果を図２に示した。

本研究によると、ギリギリまでためて打っているシューターが 20 本と最も多いのに対し、それを意識していると答えたのは、７名中２名しかいない。次に多いのはクイックで打っているシュートの 14 本であり、３名が意識していた。４名が意識していた GK をずらすということに関しては、実際には８本しかみられなかった。またビデオの映像から、ギリギリまでためて打っている場面や、GK をかわして打っている場面では、GK がシューターに対して詰める動作を行なっていることが多かった。これらの結果から、シューターは GK をずらそうという意識はあるものの、実際にはうまくかわせていないこと、またギリギリまでためて打つシュートは、シューターが能動的に行なっているというより、GK の動きを見て対応的に行なっている動作ではないかと考えられる。

【総括】

ハンドボール競技のサイドシュート決定要因について検討するため、GK と対峙する最終局面に着目し、以下の結果を得た。

1．サイドシュートにおいて最も決定率が高い GK との間合いは２～３ｍであり、シューターもそれを意識している。
2．シュートコースに関して、「近め下」が得意と答えている選手が多いが、実際には遠目が多く、決定率を向上させるには、GK を遠目に動かす駆け引きを「対峙局面」で行なっていく必要がある。
3．シュートのタイミングは、GK をずらしてから打とうと意識している選手が多いが、実際には GK をうまくずらせていない。また「ギリギリまでためる」タイミングについて、意識は薄いものの、GK の動作を観察し、対応的に多く繰り出されていた。

【参考文献】

1）下川真良・杉森弘幸・森裕太：ハンドボールにおける事例的研究―知の獲得について、第９回ハンドボールコーチング研究会抄録 pp31-32、2011
2）明石光史・谷川大幸・畑康之・田中守：ハンドボール競技におけるシュートに対するゴールキーピング研究―ノーマークシュートとサイドシュートに着目、ハンドボール研究 9:59-64、2007

左サイドと右サイドのシュートプレーは同じではない
―世界レベル、学生レベルの男子選手の比較から―

和田　拓（筑波大学大学院体育学専攻）、山口博之（筑波大学体育専門学群）、會田　宏（筑波大学）

キーワード：ゲームパフォーマンス分析、サイドプレーヤー、シュート

【緒言】

サイドシュートは防御帯の端から放たれるシュートであり、他のポジションに比べシュート角度が小さいため、技術的な課題を多く含んでいる。クンスト[1]はサイドシュートを成功させる技術的要因として防御者をかわしながら跳躍中にシュート角度を大きくすることを挙げている。また、大西[2]は具体例として空間的側面を考慮して4つの技術的要因を挙げている。

一般的に左サイドには右利きの選手が、右サイドには左利きの選手が配置されている。しかし、サイドシュートの技術的な特性は果たして左右対称と考えてよいのであろうか。そこで本研究では、左右のサイドのシュートプレーをシュート達成までのプロセスに着目して分析し、両サイドの技術的特性を比較検討することを試みた。

【方法】

1　対象

世界レベル及び学生レベルにおける右利きの左サイドのシュートプレー、左利きの右サイドのシュートプレーを分析の対象とした。世界レベルでは2011年男子世界選手権大会の10試合を、学生レベルでは2011年度関東学生1部男子リーグ戦の12試合を標本とした。

2　手順

標本とした試合を収録したDVDを再生し、世界レベルの左サイド、世界レベルの右サイド、学生レベルの左サイド、学生レベルの右サイドの4つのグループのシュートプレーを観察した。

観察項目は歩数、ボールの保持、踏み切り脚、助走の方向、ジャンプの方向、体の変化、シュートタイミング、腕の振り、シュートコース、シュートの種類、ディフェンスとの接触、シュート結果の12項目とした。

まず各項目で生起数と生起率を求め、次に4つのグループのシュートプレーを比較するためにカイ二乗検定と残差分析を行った。統計処理の有意水準はいずれも5%とした。

【結果】

シュート成功率は世界レベルの左サイドが67.1%、世界レベルの右サイドが57.1%、学生レベルの左サイドが62.9%、学生レベルの右サイドが61.4%であり、4つのグループの間で有意な差は認められなかった（表1）。

4つのグループの間で有意な差が認められたのは、歩数、ボールの保持、ジャンプの方向、腕の振り、シュートコース、シュートの種類の6項目であった。

歩数に関しては、世界レベルはいずれのサイドにおいても学生レベルに比べて1歩での踏み切りが多く、2歩での踏み切りは少なかった（χ 2値=35.237、$p<0.05$）。

ボールの保持に関しては、世界レベルはいずれのサイドにおいても学生レベルに比べて胸前でボールを保持することは少なく、腹前で保持することが多かった（χ 2値=41.958、$p<0.05$）。

ジャンプの方向に関しては、世界レベルの左サイドは他のグループに比べてイン側へのジャンプは少なく、真上へのジャンプが多かった（χ 2値=28.789、$p<0.05$）。学生レベルの左サイドは他のグループに比べてイン側へのジャンプが多く、真上へのジャンプは少なかった。

腕の振りに関しては、世界レベルの左サイドは他のグループに比べてオーバースローが多く、サイドスローは少なかった（χ 2値=18.097、$p<0.05$）。世界レベルの右サイドは他のグループに比べてサイドスローが多く、オーバースローは少なかった（表2）。

シュートコースに関しては、世界レベルの左サイドは他のグループに比べてひっぱり中段へのシュートが多かった（χ 2値=42.671、$p<0.05$）。世界レベルの右サイドは他のグループに比べて流し中段および股下へのシュートが多かった（表3）。

シュートの種類に関しては、世界レベルの左サイドは他のグループに比べて逆スピンシュートが多かった（χ 2値=20.315、$p<0.05$）。世界の右サイドは他のグループに比べてスピードボールが多く、ループシュートが少なかった。学生レベルの右サイドは他のグループに比べてループシュートが多く、逆スピンシュートが少なかった（表4）。

【考察】

1　左右での共通点

世界レベルではいずれのサイドでも学生レベルに比べて1歩での踏み切り、腹前でのボール保持が多かった。この結果から左右いずれのサイドにおいても共通したシュート技術が存在していると考えられる。つまり、サイドにはボールを保持する前に踏み切りのための助走を開始し、ボール保持後は1歩の助走でシュート達成できることが必要となる。また、一般にボール保持後の動作に移りやすいとされている胸前ではなく、腹前でのボール保持からであってもシュート達成で

きることも必要とされる。

2　左右での相違点

腕の振りにおいて、世界レベルの左サイドと右サイドは全く逆の結果を示した。この結果からいずれのサイドもシュート角度を大きくしようという共通したねらいを持っていると考えられるが、左サイドはオーバースローによって高さを出し、縦の角度を大きくすることを重視していると考えられる。それに対し、右サイドではサイドスローによって横の角度を大きくすることを重視していると考えられる。その背景として左利きよりも右利きの選手の方が圧倒的に多いため、左サイドには右利きの長身選手を配置することが可能になるからだと推察される。そのため左右のサイドでは利用できる上下左右のシュート角度が異なり、その差異がシュートコース、シュートの種類、ジャンプの方向の結果に反映されているのだと考えられる。

表1　シュート結果

	学生		世界		合計
	右サイド	左サイド	右サイド	左サイド	
ゴール	43(61.4%)	44(62.9%)	40(57.1%)	47(67.1%)	174(32.1%)
ノーゴール	27(38.6%)	26(37.1%)	30(42.9%)	23(32.9%)	106(37.9%)
合計	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	280(100.0%)

カイ2乗値=1.518,ns

表2　腕の振り

	学生		世界		合計
	右サイド	左サイド	右サイド	左サイド	
オーバースロー	43(61.4%)	39(55.7%)	23(32.9%) †	46(65.7%)*	151(53.9%)
サイドスロー	27(38.6%)	31(44.3%)	47(67.1%)*	24(34.3%) †	129(46.1%)
アンダースロー	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
合計	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	280(100.0%)

カイ2乗値=18.097,ns、p<0.05　*：有意に多い　†：有意に少ない

表3　シュートコース

	学生		世界		合計
	右サイド	左サイド	右サイド	左サイド	
流し上	10(14.3%)	17(24.3%)	12(17.1%)	8(11.4%)	47(16.8%)
流し中段	5(7.1%)	3(4.3%)	15(21.4%)	4(5.7%)	27(9.6%)
流し下	12(17.1%)	18(25.7%)	10(14.3%)	16(22.9%)	56(20.0%)
ひっぱり上	4(5.7%)	3(4.3%)	4(5.7%)	6(8.6%)	17(6.1%)
ひっぱり中段	5(7.1%)	1(1.4%)	5(7.1%)	11(15.7%)*	22(7.9%)
ひっぱり下	18(25.7%)	14(20.0%)	9(12.9%)	17(24.3%)	58(20.7%)
頭上	11(15.7%)	8(11.4%)	5(7.1%)	6(8.6%)	30(10.7%)
股下	5(7.1%)	6(8.6%)	10(14.3%)*	2(2.9%)	23(8.2%)
合計	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	280(100.0%)

カイ2乗値=42.671,ns、p<0.05　*：有意に多い　†：有意に少ない

表4　シュートの種類

	学生		世界		合計
	右サイド	左サイド	右サイド	左サイド	
スピードボール	57(81.4%)	59(84.3%)	65(92.9%)*	56(80.0%)	237(84.6%)
ハーフスピードボール	3(4.3%)	3(4.3%)	2(2.9%)	2(2.9%)	10(3.6%)*
逆スピンシュート	0(0.0%) †	3(4.3%)	2(2.9%)	8(11.4%)*	13(4.6%)
ループシュート	10(14.3%)†	5(7.1%)	1(1.4%) †	4(5.7%)	20(7.1%)
	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	70(100.0%)	280(100.0%)

カイ2乗値=20.315,ns、p<0.05　*：有意に多い　†：有意に少ない

【結論】

左サイドと右サイドの技術的特性を比較検討した結果、以下の3点が明らかとなった。

(1)いずれのサイドにおいてもボール保持から少ない助走で、胸前でボールを保持できなくともシュート達成するという技術が要求される。

(2)左サイドは長身の選手が真上へジャンプし、上から腕を振り下ろすことで左右だけではなく上下のシュート角度を生かしたシュートを行っている。

(3)右サイドはサイドスローで左右のシュート角度を大きく使い、スピードボールでゴールキーパーの位置取りが間に合わないようにシュートを行っている。

【参考・引用文献】

1）ヨアン・クンスト＝ゲルマネスク（1981）ハンドボールの技術と戦術、p.122-124

2）大西武三（1977）右利きですがサイドからの切り込んで打つシュートの方法は？、渡辺慶寿ほか（編）、実戦ハンドボール、p.40-45

北信越かがやき総体に参加して

新潟県ハンドボール協会　水内 隆夫・高橋 英士

「君は今　希望とともに　緑の大地を　かけぬける」のスローガンのもと、7月29日から8月3日までの6日間、全国高等学校総合体育大会高松宮記念杯第63回全日本高等学校ハンドボール選手権大会が、新潟県柏崎市・上越市・刈羽村の6会場で開催されました。私自身、三年連続のインターハイ参加、しかも地元開催ということで、沖縄県・岩手県での運営の素晴らしさや審判団に対しての暖かいご配慮、大会を支えた地元の方々のご苦労・感謝の気持ちを思い浮かべながら、不安や期待が入り混じった大会でした。

7月27日、審判長、副審判長、競技委員長の方々と、2市1村6会場を4時間半、走行距離約230㎞の事前視察を行いました。室内の明るさは元よりラインの明瞭さ、ベンチ・TDの位置などを点検・改善、さらに審判控室の位置や環境など、細部に至る所まで確認しました。ただ、想像していた以上の猛暑の対策までは、その時は考えが及びませんでした。その後、審判長・副審判長会議でさらに会場のこと、レフェリングのことがより細やかに話し合われたことは言うまでもありません。

28日午前10時から、北は北海道、南は沖縄23ペアの審判団、誰ひとり遅れることなく46名プラス正副審判長、全国高体連専門部、審判審査指導委員長が参加した審判研修会が始まりました。始めに競技規則テスト。これは前回の問題集から変更もあり、やや戸惑った所もありましたが、以前よりは正答が多かったのではないかと思います。その後の自己紹介で同年齢の審判員が減り、寂しい想いもありましたが、逆に有望な若手レフェリーの多さに頼もしさを感じることができました。研修会は武智審判長の準備された資料を元に、「ゲームを管理するための注意点」、「CRとGRの役割分担」、「申し合わせ事項」等を再確認しました。特に最初の10分間での基準の示し方や位置取りについて、丁寧なご説明をいただきました。11時30分からマッチバイザーの方々も加わった審判会議にて、今大会に向けた、さらに綿密な打ち合わせが行われ、その後の代表者会議に備えることができました。6月末に出来上がったばかりの会場アルフォーレ柏崎での開会式はとても落ち着いた雰囲気の中で行われました。29日、朝6時からレフェリーミーティングを行い、朝食後、7時30分より6会場に貸切バスで移動し、いよいよ一回戦が始まりました。どの試合も高校生らしく熱く激しいものとなり、我々が担当した試合も得点差以上に白熱した内容でした。

全試合終了後、会場毎にミーティング、宿舎に戻って20時から全体でのミーティングを行いました。上越市の会場は高速を使っても1時間程度かかるので、バスの中でミーティングを行い、全体ミーティングになったそうです。ミーティングでは、会場・オフィシャル・判定などについて、各会場の担当審判員より報告があり、全体での共通理解を図りました。その後、かなり遅めの夕食、審判着の洗濯をし、次の日に備えました。毎年のことなので常に参加されているトップレフェリーの方や常連の方は慣れているのでしょうが、このハードな日程が4日間も続くと思うと、レフェリングだけでなく、強固な心身の必要性を改めて感じました。二回戦、三回戦と進む中で、各会場のオフィシャルやモップ係の高校生も慣れてきたのか、スムーズな動きが見られるようになりました。そんな時にどこかの会場に来ていた保護者の方でしょうか、「高校生の補助役員の対応が清々しく負けても爽やかな気持ちになった。」という内容のメールが日本協会に届き、すぐに我々にも伝えられました。次の日に各会場の補助役員にそのことを伝えると照れくさそうな表情だったのを忘れません。

最終日、決勝戦が男子は柏崎総合体育館、女子はリージョンプラザ上越を会場に行われました。女子会場にはNHKでの放映のため、カメラが入り、益々盛り上がりました。男子は岩国工業、女子は高松商業が優勝し、大会の幕を閉じました。

最後になりますが、この大会を参加チーム、役員とともに支え、盛り上げて頂いた地域の皆様、保護者の皆様、そしてハンドボール部ではない地元高校生補助役員の皆様に感謝したいと思います。



第41回全国中学校大会

開催期日：2012年8月19日(日)～22日(水)
会　場：茨城県・常総市、守谷市、坂東市

【男 子】

▼1回戦

月輪(京都) 35(17－16、18－17)33 鹿骨(東京)
大体大附属(大阪) 27(12－8、15－10)18 大分(大分)
総社西(岡山) 28(10－11、18－15)26 東山(岐阜)
塩江(香川) 24(10－13、14－7)20 けやき台(茨城)

▼2回戦

平田(山口) 26(10－13、16－11)24 月輪(京都)
浦添(沖縄) 32(16－10、16－15)25 氷見南部(富山)
水海道西(茨城) 30(16－11、14－11)22 本宮第一(福島)
はとり(愛知) 34(15－9、19－12)21 大体大附属(大阪)
総社西(岡山) 28(14－10、8－12)25 東邦大東邦(千葉)
(2－2、4－1)
明倫(福井) 26(13－11、13－12)23 多々良中央(福岡)
菰野(三重) 26(9－11、17－13)24 豊中第一(大阪)
塩江(香川) 30(15－6、15－12)18 凌雲(北海道)

▼3回戦

浦添 28(12－13、16－14)27 平田
はとり 28(14－11、14－8)19 水海道西
明倫 22(10－10、12－11)21 総社西
塩江 25(12－11、13－9)20 菰野

▼準決勝

はとり 29(13－12、16－12)24 浦添
明倫 32(10－10、13－13)31 塩江
(4－3、2－3)
(3－2)

▼決勝

はとり 31(15－13、16－12)25 明倫

【女 子】

▼1回戦

凌雲(北海道) 19(10－4、9－13)17 荒川(和歌山)
水海道(開催地) 17(6－8、11－8)16 総社西(岡山)
東久留米西(東京) 25(12－8、13－12)20 松橋(熊本)
培良(京都) 24(12－12、12－7)19 中山(岐阜)

▼2回戦

けやき台(茨城) 28(14－7、14－11)18 凌雲(北海道)
桜田(愛知) 19(9－8、10－9)17 信夫(福島)
氷見十三(富山) 19(6－11、13－7)18 仲西(沖縄)
高南(大阪) 23(13－8、10－9)17 水海道(開催地)
平田(山口) 23(13－8、10－5)13 東久留米西(東京)
小松南部(石川) 22(7－12、15－6)18 上野(愛知)
香川第一(香川) 21(8－2、13－10)12 西中原(神奈川)
神森(沖縄) 33(17－6、16－18)24 培良(京都)

▼3回戦

けやき台 24(15－3、9－4)7 桜田
氷見十三 27(13－11、14－9)20 高南
平田 20(7－6、13－4)10 小松南部
神森 22(11－10、7－8)21 香川第一
(1－2、3－1)

▼準決勝

けやき台 18(7－11、11－6)17 氷見十三
神森 21(8－13、13－6)19 平田

▼決勝

けやき台 23(11－6、12－14)20 神森

第39回全国高等専門学校選手権大会

開催期日：2012年8月21日(火)～22日(水)
会　場：広島県・呉市

■予選リーグ1組

函館高専 32 (16－13、16－17) 30 秋田高専
函館高専 31 (13－12、18－13) 25 北九州高専
秋田高専 30 (14－9、16－9) 18 北九州高専

■予選リーグ2組

大阪府大高専 26 (11－12、15－13) 25 高知高専
大阪府大高専 32 (15－3、17－12) 15 呉高専
高知高専 34 (17－7、17－6) 13 呉高専

■予選リーグ3組

米子高専 19 (9－10、10－8) 18 鈴鹿高専
米子高専 34 (20－7、14－6) 13 東京高専
鈴鹿高専 26 (15－8、11－11) 19 東京高専

■予選リーグ第4ブロック

徳山高専 30 (16－13、14－12) 25 熊本高専熊本
徳山高専 31 (14－11、17－8) 19 石川高専
熊本高専熊本 42 (20－15、22－15) 30 石川高専

■準決勝

▼準決勝

大阪府大高専 25 (8－11、17－11) 22 函館高専
徳山高専 19 (10－9、9－9) 18 米子高専

■決勝

徳山高専 29 (13－7、16－9) 16 大阪府大高専

第14回全日本ビーチハンドボール選手権大会

開催期日：2012年8月21日(火)～22日(水)
会　場：広島県・呉市

【男 子】

▼予選Aブロック

東海Weeds!(愛知) 2(12－20、18－14)1 ボンチフェローズ(大阪)
(9－5)
東海Weeds!(愛知) 2(27－10、23－13)0 海自江田島(広島)
ボンチフェローズ(大阪) 2(18－13、18－12)0 海自江田島(広島)

▼予選Bブロック

HC大阪(大阪) 2(10－15、19－10)1 FST(東京)
(5－4)
HC大阪(大阪) 2(16－15、15－10)0 兵庫選抜(兵庫)
FST(東京) 2(12－10、14－8)0 兵庫選抜(兵庫)

▼5・6位決定戦

海自江田島 2(7－6、6－14)1 兵庫選抜
(7－5)

▼準決勝

東海Weed's 2(20－21、16－12)1 FST
(6－2)
HC大阪 2(21－16、16－18)1 ボンチフェローズ
(8－6)

▼3位決定戦

ボンチフェローズ 2(17－16、20－21)1 FST
(7－2)

▼決勝

HC大阪 2(14－16、23－20)1 東海Weed's
(10－9)

【女 子】

▼予選Cブロック

日本体育大学(東京) 2(18－8、9－8)0 まるもっこりん(兵庫)
日本体育大学(東京) 2(12－2、10－9)0 風見鶏クラブ(兵庫)
まるもっこりん(兵庫) 2(9－8、2－13)1 風見鶏クラブ(兵庫)
(3－2)

▼予選Dブロック

夙川学院(兵庫) 2(9－11、13－8)1 東海Weeds!(愛知)
(4－2)
夙川学院(兵庫) 2(20－3、12－9)0 あぶらおおめ(東京)
東海Weeds!(愛知) 2(8－6、10－5)0 あぶらおおめ(東京)

▼5・6位決定戦

あぶらおおめ 2(10－7、14－8)0 風見鶏クラブ

▼準決勝

日本体育大学 2(9－5、6－7)1 東海Weeds!
(4－2)
夙川学院 2(14－12、14－5)0 まるもっこりん

▼3位決定戦

東海Weeds! 2(12－8、6－12)1 まるもっこりん
(5－3)

▼決勝

日本体育大学 2(13－2、11－7)0 夙川学院

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」9月入会・継続会員

【岩　手】上町祐隆【千　葉】相浦美波【東　京】土田　健、杉山　茂、平賀とみ子【神奈川】種村明彦
【愛　知】禰津行雄、田中基明、岡山尚司、岡山美恵子、牧野千別、森脇正貴、西　みどり【三　重】貝沼圭吾
【大　阪】折橋裕智、伊藤慎吾【兵　庫】大西盛雄、大西美樹【岡　山】中島未来、渡辺まどか、瀬島あずさ、加内梨穂、阿部由美子【広　島】青戸克好【佐　賀】高橋里江【熊　本】古庄直也

【11月の行事予定】

【会　議】
11月10日(土)　第2回理事会（東京）

【大　会】
11月14日(水)～18日(日)
高松宮記念杯男子55回女子48回全日本学生選手権大会（福岡県・福岡市）
11月17日(土)・18日(日)
第10回日本車椅子競技大会（滋賀県・彦根市）

※お詫びと訂正
前号（2012年10月号）5ページに掲載されました「第63回全日本高等学校選手権大会」の「女子優秀選手」のお名前で、「山根紗恵（華陵）」と記載しましたが、正しくは「山根沙恵（華陵）」選手でした。お詫びして訂正させて頂きます。

HANDBALL CONTENTS Nov.

（登録チームの購読料は登録料に含む）


asics
GEL
SpEVA
doubt
doubt
fatigue
doubt
fatigue

いつも新しい空を目指して。

(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第五三一号

平成二十四年十月二十六日印刷

平成二十四年十一月一日発行

東京都渋谷区神南一—一—一

電話 代表〇三—三四八一—二三六一

振替 〇〇一二〇—七—一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円